

第4章 墳丘墓の調査成果

第1節 調査の概要

(1) 調査の契機と経過

梅田萱峯墳丘墓は、梅田萱峯遺跡の4区に所在する。昨年度調査で見つかり、今年度も引き続き調査を行った。昨年度の調査を開始した当初は、高まりも顕著ではなく、試掘トレンチも入っていなかったこともあり、墳丘墓の存在は認識していなかった。重機による表土剥ぎの前、石列の発見が契機となり、ピンポールで周辺を探ると石列がコの字形にめぐることが判明した。また周辺には、弥生時代中期の土器が散布することから、弥生時代中期の墳丘墓の可能性が高いと判断した。これによりただちに周辺の表土剥ぎを重機による掘り下げから、手掘りに切り替え、遺物は極力出土地点の座標の記録を行いながら取り上げを行うこととし、慎重に調査を進めることとした。

埋葬施設の調査は、当初盛土上面にて精査を繰り返し行い、墓壙検出を試みたが、墓壙は検出されなかった。しかし明確な掘り込みの肩はもたないが、東西方向の落ち込みが認められたため、これを木棺の陥没坑とみて東西方向の埋葬施設の存在を想定し、これに直交するトレンチを設定した。これに沿って墳丘の断ち割りを行ったところ、地山面にて第1主体部の墓壙を検出した。第2主体部は、今年度の調査の終盤、北側貼石の調査の折、その直下で検出した。

柱穴は、昨年度調査時に墳丘墓に伴うものとして4基を確認した。今年度墳丘の解体に伴い、盛土及び貼石を除去したところ、新たに5基が確認され、合計9基の柱穴を伴うことが判明した。

調査により貼石は全て取り上げ、盛土の除去を行い、下層遺構の有無を確認した後、調査を終えた。

この度行う本報告では、調査の進展に伴い昨年度の概報とは事実記載で異なる点がある^(註1)が、今回の報告をもって正式な報告とする。特に柱穴に関する昨年度調査時の所見は、大幅な変更を要する。また埋葬施設も新たに1基見つかり、昨年度報告した墳丘の中心に位置する埋葬施設を第1主体部、今回北側貼石直下で見つかった土壙墓を第2主体部として報告を行う。

(2) 調査前の現況

調査前は針葉樹林であり、約30年前の植林とみられる。それ以前の土地利用の状況は不明であるが、4区の南から6区にかけて顕著な耕作溝は、墳丘墓の周辺には認められず、人為的な地形の改変は窺えない。また第1主体部の西側に小規模な攪乱坑があったものの、盗掘にあった様子も認められないことから、遺存状況は良好といえる。調査前の地形を仔細に観察すると、墳丘墓の南側がかるうじて鞍部となる状況が窺えたが、総じて墳丘の存在は顕著ではなかった(PL.39-1)。

(3) 調査の概要

調査の結果、墳丘墓は長軸11.3m、短軸8.6mの長方形を呈し、周囲に貼石をめぐらすことが判明した。また四隅の突出は認められない。埋葬施設は2基検出した。墳丘のほぼ中心に位置する第1主体部は組合式木棺を納めた木棺墓であり、北東に位置する第2主体部は土壙墓であった。両者とも棺内への副葬品は皆無であったが、第2主体部の墓壙上には土器の供献が見られた。

また第1主体部を囲う9基の柱穴の検出は特筆される。層位的にみて、埋葬終了後の墓上施設とみられる。このような弥生時代中期後葉の墳丘墓の全面調査の実施により、墳丘墓の築造の諸段階を追うことが可能となり、当該期の墳丘墓の実態を解明する上で貴重な調査成果を得ることができた。

以下、項目別に詳細を述べていくこととする。 (小山)

第2節 墳丘

(1) 立地・規模・墳形

梅田萱峯墳丘墓は、標高63mの丘陵縁辺部にあり、南東から北西へ下る緩斜面に立地する(第122図)。周辺には、同時期の住居跡等が分布する(第120図)。墳丘は長軸11.3m、短軸8.6mの南北に長い長方形を呈する。四隅の突出は見られない。墳丘高は、最も比高差が大きい西側区画溝の底から墳頂まで63cmを測る。

(2) 盛土

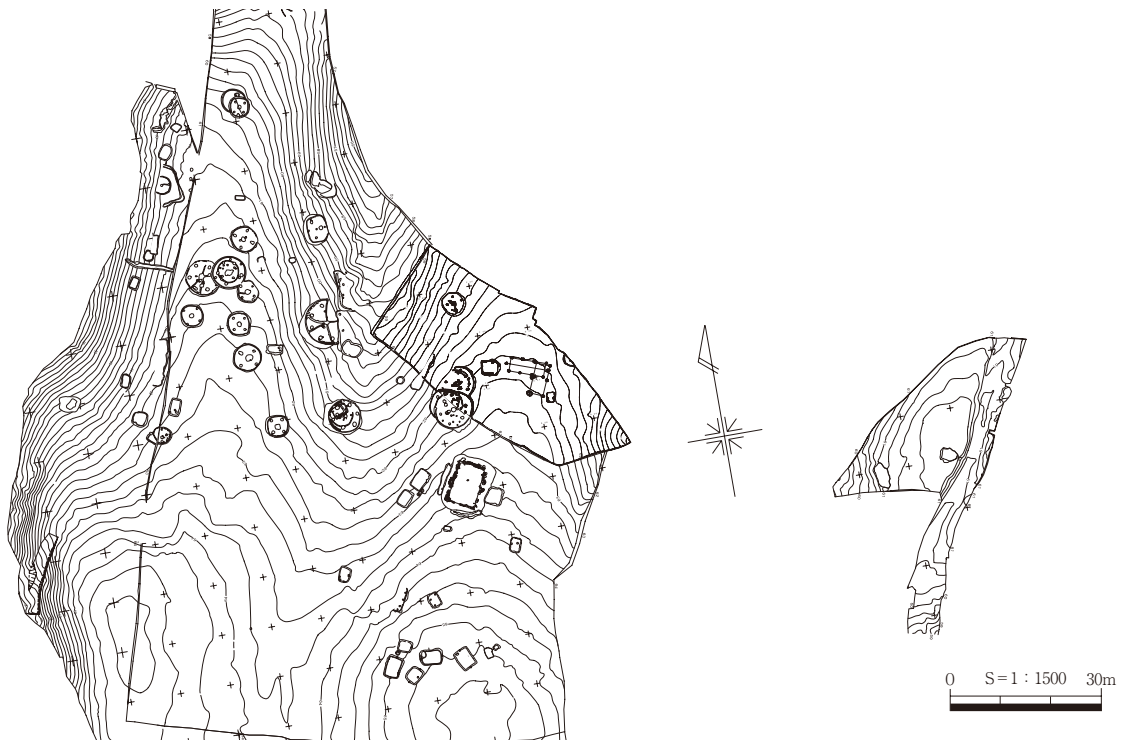
墳丘はすべて盛土により構築されており、地山削り出しによる高まりは認められない。盛土の厚さは高所側にあたる南東部で27cm、最も低い北西部で44cmである。盛土直下は大山の火山灰土であるホーキ層の2次堆積からなる地山であり、旧表土は認められなかった。このことから盛土の開始に先立ち、旧表土を除去し、整地が行われたものと推定される。

盛土は全て粘性土であり、色調により暗褐色系、地山の土を含む暗黄褐色系、地山掘削土である黄褐色系の大別3層に分けられる(第121図)。大まかな傾向としては、盛土下部に黄褐色土、上部は暗黄褐色土、貼石裏込土に暗褐色土を使用する傾向が窺えるが、厳密なものではない。また盛土単位に規則性はなく、墳丘構築を中断した面や硬化面或いは土器や焼土、炭化物の面的な広がりといった痕跡は認められない。このように墳丘の構築単位は明確ではない。

以下の本文では柱穴の掘削時を境にそれより前を「1次盛土」、柱設置後の盛土を「2次盛土」と呼称する。その判別可能な範囲はP3～5の周辺に限られ、大部分ではその峻別は不可能である。この場合単に「盛土」として説明を行う。

(3) 区画溝

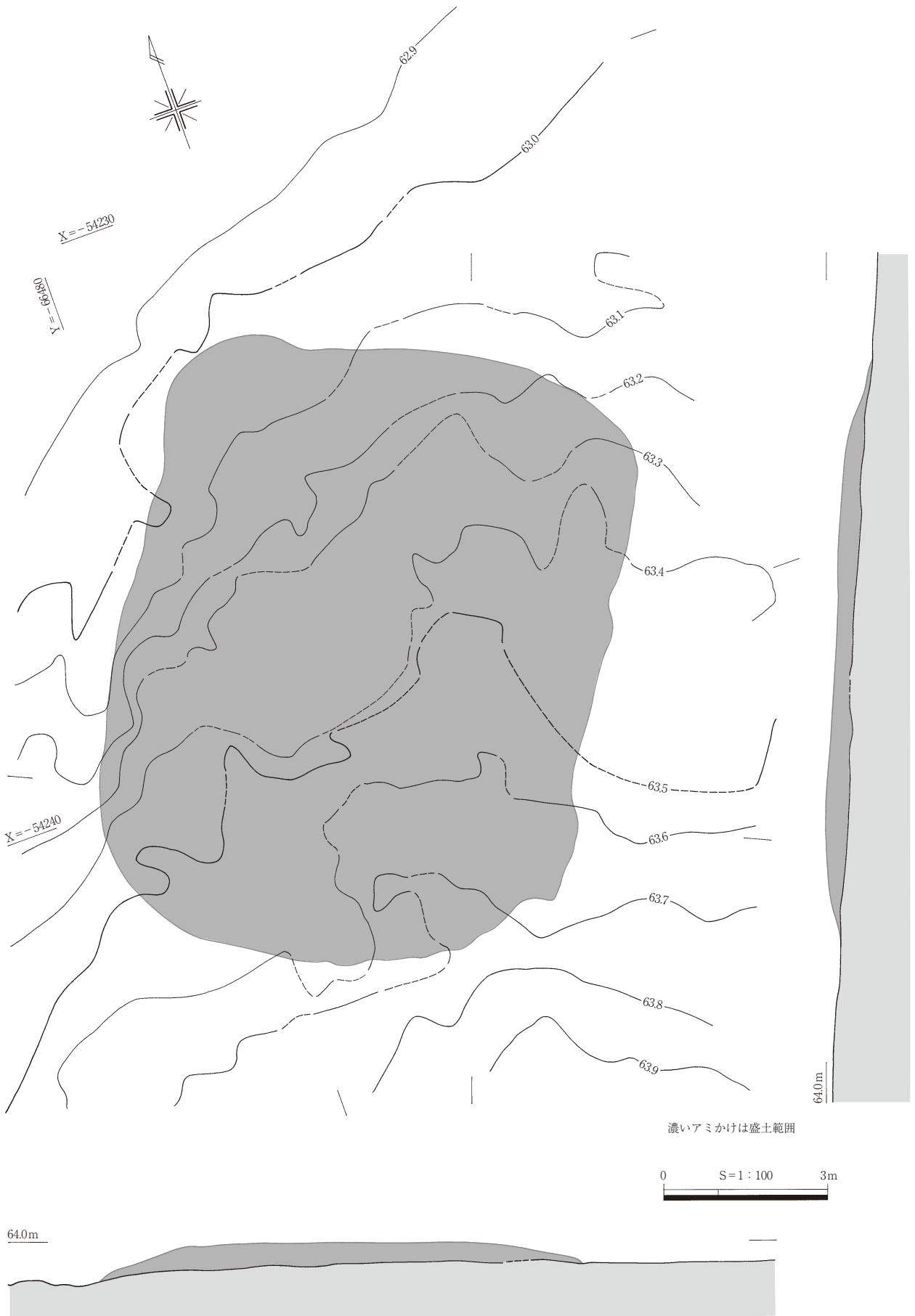
墳丘の南側と西側に溝を伴う。コーナー部分は途切れており、両者は接続しない。溝の形状や埋土の状況は両者ともに共通する。区画溝と盛土との関係であるが、墳丘側の溝の立ち上がりは、盛土に



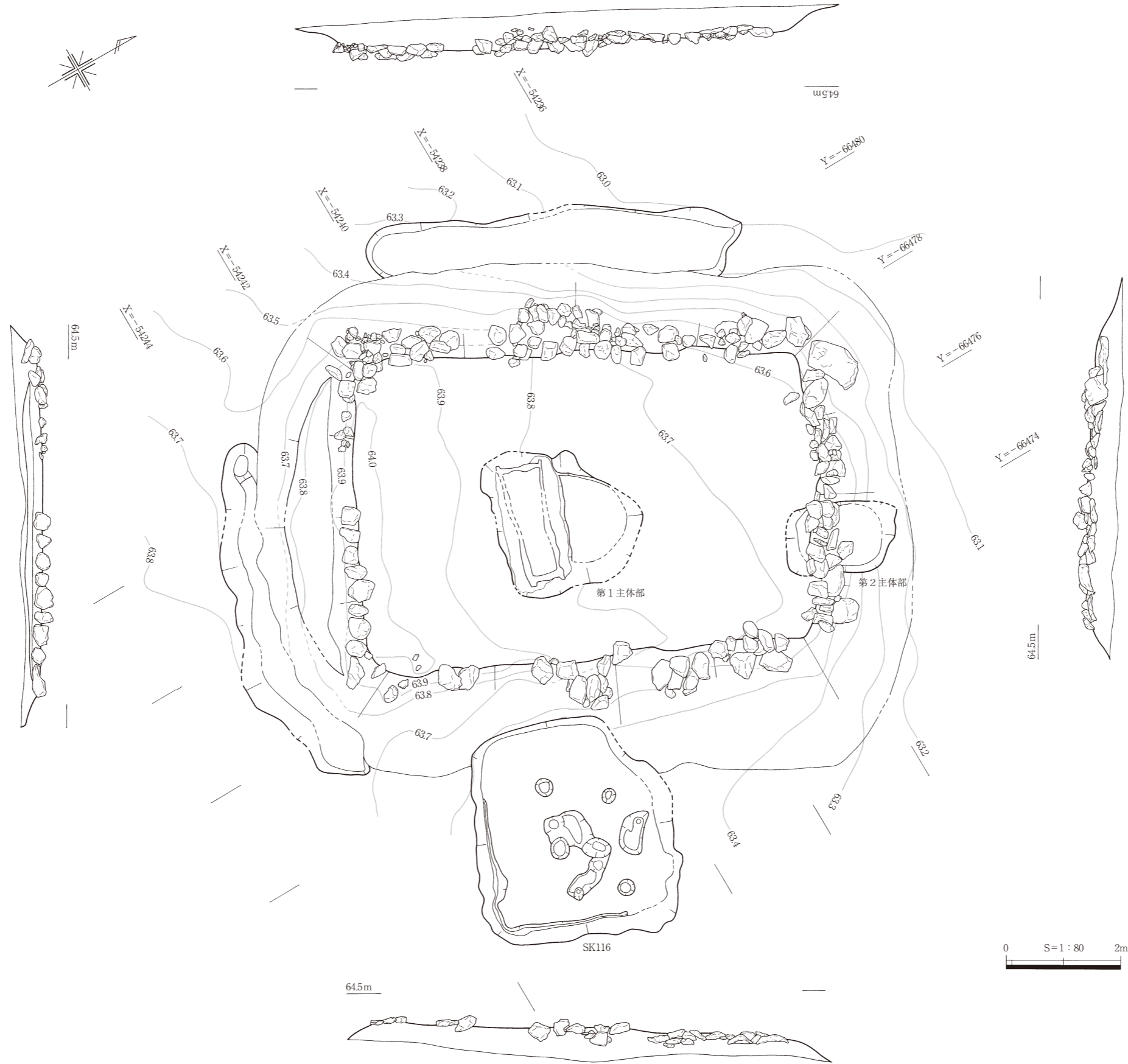
第120図 墳丘墓周辺の遺構(弥生時代)



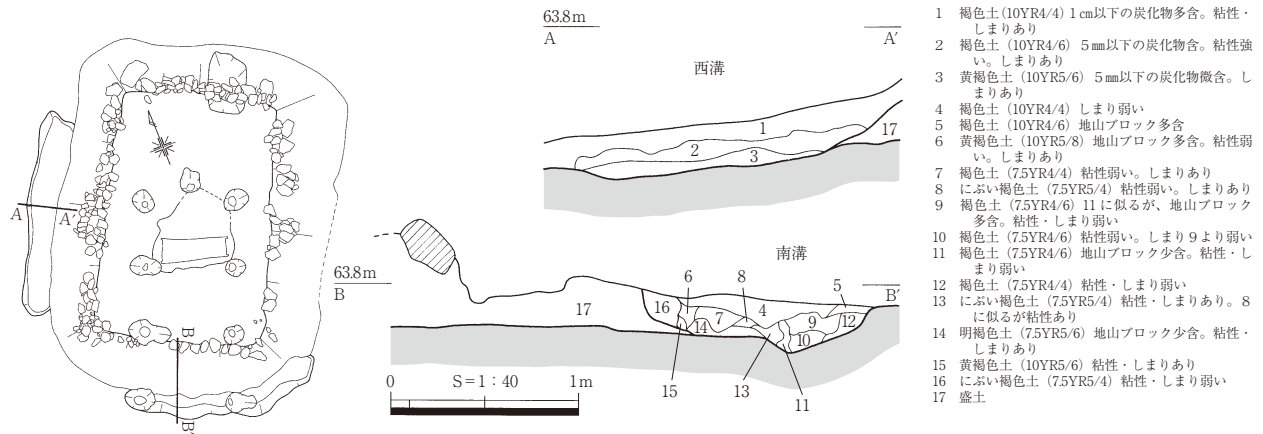
第121図 墳丘盛土土層図



第122図 盛土除去後地形測量図



第123図 墳丘墓平・立面図



第124図 区画溝土層図

より構築された墳裾が溝底から立ち上がることから、溝の掘削は、少なくとも墳丘の大部分の構築を終える1次盛土の工程を経た後のこととみられる(第124図)。

西側区画溝(第124図、PL.45) 墳丘上面とその周辺を覆う黒褐色土、暗褐色土を除去した地山面にて検出した。幅は0.89～1.22m、長さ6.52mの直線的な溝である。掘り込みは浅く、深さは僅か11～17cmである。横断面形は浅い皿状を呈し、西側の肩は地山から掘り込まれているが、東側の立ち上がりは、盛土による墳裾の立ち上がり一致する。溝底面の標高は南端で63.21m、北端で62.97mと南から北へ下降する。溝の両端は、ゆるく立ち上がるため、溝の肩はやや不明瞭である。埋土は暗黄褐色系の盛土によく似た土であり、転落石や土器片が出土した。

南側区画溝(第124図) 西側と同様、墳丘上面とその周辺を覆う暗褐色土や黒褐色土を除去した地山面にて検出した。溝は幅0.88～1.26m、長さ6.15mを測り、墳丘の南西端より2.2mほど東へ離れた地点から、墳丘裾に沿って東へ延び、東端は墳丘東南端を北へ回りこみ、やや弧状を呈する。横断面形は浅い皿状を呈し、南側は地山が溝底より立ち上がるが、北側の溝底は、地山の立ち上がりはわずかで、その上は盛土による墳丘テラスの裾の立ち上がり一致する。深さは3～17cmである。溝底の標高は東端が63.67m、西端で63.55mと東から西へ徐々に下降する。埋土中から転落石や土器片が出土した。

(4) 貼石

墳丘の四方には貼石が施される。貼石の多くは原位置を留め、遺存状況は比較的良好である。貼石は墳丘斜面上部を巡り、墳裾には施されていない。南側貼石下端の標高は63.70～63.93mの間に収まり、西がやや低い。北側貼石では63.28～63.50mの間に収まり、同様に西が低い。そして東西の両長辺の貼石は、南から北へ行くほど下降し、約30～40cmの高低差がある。これは地山の傾斜に起因するものと見られる。石の据え方は、大きく分けて2種類あり、一つは石の平滑な面を外に向け立石状に据え付ける手法で、これはさらに石の長軸を縦にして40度ほど傾け設置する手法(a手法)と、立石状に平らな面を垂直に立てる手法(b手法)に細分される。いまひとつは石の小口ないしは長側面を外側に向け、2～3段ほど石を積む手法で、小口積みを行うもの(c手法)と、長側面を外に向ける長手積み(d手法)がみられる。概してa手法は南側貼石に多く、b手法は西側北半部の貼石に認められ、c手法は北側貼石と東側貼石北半部に、またd手法は主に西・北側貼石の各所に認められた。

また貼石各所に、赤く変色したり、割れたりといった被熱痕が認められた。しかし盛土面に被熱した痕跡はなく、また隣り合う石に被熱痕はない。さらに盛土と接する底面が被熱するものもあること



写真1 北側貼石西端部(北から)



写真2 北側貼石東半部(北から)

から、被熱痕は貼石として設置する以前に生じたことは明らかである。しかしそれがいつの段階であるのか、また意図的なものなのか、といった点は不明である。

また、墳頂部からも40cm大の礫をはじめ、拳大から人頭大の礫が出土している。第1主体部周辺に多いことから標石であった可能性がある。しかし出土層位は盛土を覆う表土及び黒褐色の流土中であることから、若干ながら2次的に移動しているものとみられる。

北側貼石中央付近の3点の石に鋭利な刃物による線状痕が認められた。いずれも貼石外面の一部に数条刻まれていることから、貼石設置後に行われたとみられるが、時期、性格は不明である。

またいずれの隅部でも、貼石による隅部稜線への配慮は窺えなかった。以下各所ごとに詳述する。

北側貼石 52点の石で構成される。長さ40cm前後、幅30cm前後ほどの板状安山岩の垂角礫が多く、中には垂円礫も混じる。貼石の背面には、石を据えるための掘方が認められ、石の設置にあたり、盛土の肩をL字に掘り込み、石を据えた後、暗褐色土を充填していた。

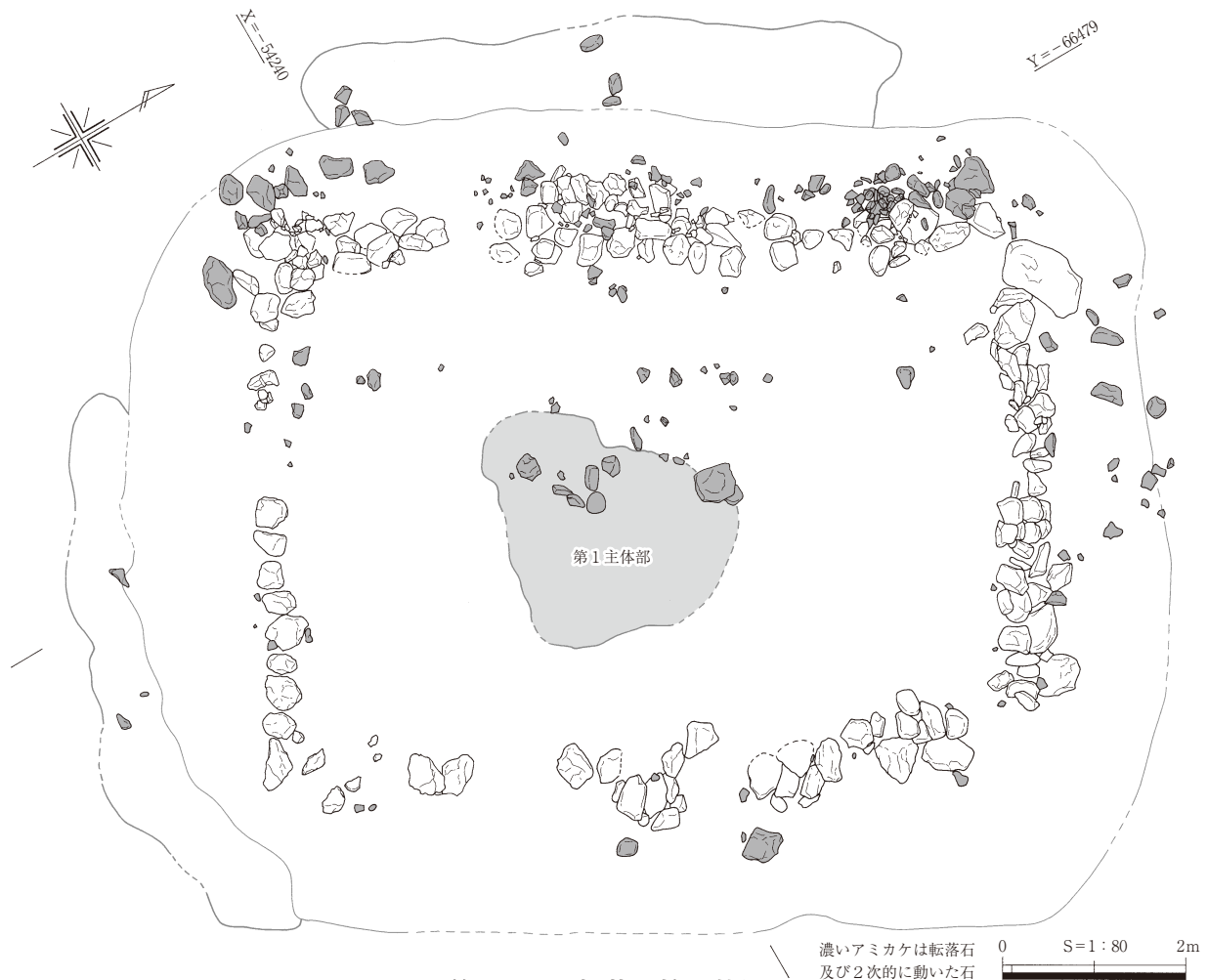
西端には長さ100cm、幅50cm、厚さ15cmの貼石の中で最大の板状安山岩がある(写真1)。重量は未計測であるが、成人男性4～5人でようやく持ち上げることができた。土層観察の結果、この石は一部盛土に接するものの、大部分は木の根の攪乱土の上であり、若干動いているものと見られる。これより東の2石は、やや小ぶりの板状安山岩の垂角礫をa手法で設置し、その上は一部しか残存しないが、通常の大サイズの石材をb手法により据えたとみられる。

中ほどから東半部にかけては、一部石の欠落もあるが、c手法で3段ほど積み上げ、背後に暗褐色系の土を充填する例が大半を占める(写真2)。この場合、最下部の石は他より長い石を用いる傾向が窺えた。また少数ながらb手法も一部で見受けられる。また石と石の間に暗褐色土が薄く噛んでいる箇所もあることから、土の充填は1石ごとに行われたことが窺える。

貼石を検出する過程で流土中から10数点あまりの転落石が出土した(第125図)。多くは西半部からの出土で、墳裾から80cmまでの範囲に分布する。転落石の量からみて失われた貼石はそう多くはない。

東側貼石 遺存状況はよくない。特に南半部において、石の欠落が著しい。総数44点の石で構成される。石材は北側貼石と同様、板状安山岩の垂角礫が主体で、少量の垂円礫を含む。墳丘東側は最も高低差が小さく、墳丘斜面の傾斜は緩い。このためか東側貼石の背面には明確な掘方は認められず、墳丘斜面に直接石を据え、背後に暗褐色土を充填したものとみられる。

北端はc手法もしくはd手法を用いて貼石を2段施す(PL51)。下段は一辺が50～60cmほどの比較的大きめの石を配し、上段は長さ約30～50cmほどの細長い石を用いる。これより南は石の欠落が多い(PL50)。中央付近は調査時東側張出部とした箇所であるが、調査後の検討の結果、西側のような石の張り出しはなく、むしろ比較的残りがよい北端の石の裾のラインの延長上に位置することから、



第125図 転落石検出状況

石の欠落により、見かけ上生じたものであり、張出部とはみなしがたいと判断した。ここは石の積み方が変化する箇所にあたり、北半部のcないしはd手法による貼石の設置はこのあたりで収束し、これより南はa手法により貼石が設置されている。

南側貼石 22点の石で構成される。西半部は欠落部分が多いが、東半部は原位置を保つものが多く、比較的良好な遺存状況である。ただ東端部の石は、取り上げ時の所見によると西端が盛土面と接するものの大部分が木の根の攪乱土の上であり、石自体も東へ大きくせり上がることから若干動いたものと判断した。南側貼石の大部分は、西端部を除き基本的には一段のみa手法を用いて貼石を施す(第126図)。石材は他の部分と同様の板状安山岩で、長さ40cm、幅25cmほどの亜角礫が主体であるが、若干ながら亜円礫を含む。石の外面は平滑であるが、裏面は丸みを帯びたり、弱い稜線を持つなど接地面としては不安定である。そのためか石を据えるための掘方を伴い、石の背後に暗褐色土を充填し、安定化を図っていた。貼石下端で盛土上面が平坦気味となり、緩いテラス面を形成する。

西側貼石 総数126点と最も多くの石で構成され、遺存状態は比較的良好である。石材は板状安山岩が主体で、長さ40cm、幅30cmほどの亜角礫が多いが、若干ながら亜円礫をも含む。また北端部の流紋岩質砂岩の石は、穿孔貝による孔が多数あり、海岸部から持ち込まれたとみられる^(註2)(写真4)。

西側貼石の中央には、張出部がある(後述)。張出部より北側の貼石の設置法は、b、c、dの各手法が混在する。いずれも一段のみである。調査の序盤に墳丘斜面において、円礫や被熱礫などが集石状を呈していた(写真3)。石の中には敲石も含まれていた。人為的な集積の可能性もあるが、盛土よ



写真3 集石状をなす転落石



写真4 海岸部から持ち込まれた石

り15cm上方の流土中であることから、墳頂部からの2次的移動に伴うものとみられる。

張出部より南側の貼石は、木の根の攪乱等で一部石を欠くが、c手法により三段積みによって設置されていた(第128図)。

北東隅 木の根の攪乱は受けつつも、貼石の遺存状況には影響はなく、比較的良好な残り具合である。北側貼石、東側貼石ともに小口積みで貼石を施すが、いずれもコーナーの手前で収束する。また転落石も検出されなかったことから、当初から貼石が施されていなかった可能性もある。

南東隅 南側貼石、東側貼石ともにコーナー付近で途切れ、隅部の石は欠落する。南側貼石東端は、長さ59cmの垂角礫が横長に設置され、前述のとおり、木の根の攪乱により若干動いた状態であった。

東側貼石は南端にかろうじて1石ほど残存するが、南側と同様、コーナー部分にて途切れる。この付近の石の転落は顕著ではなく、隅部は本来貼石がなかった可能性もある。

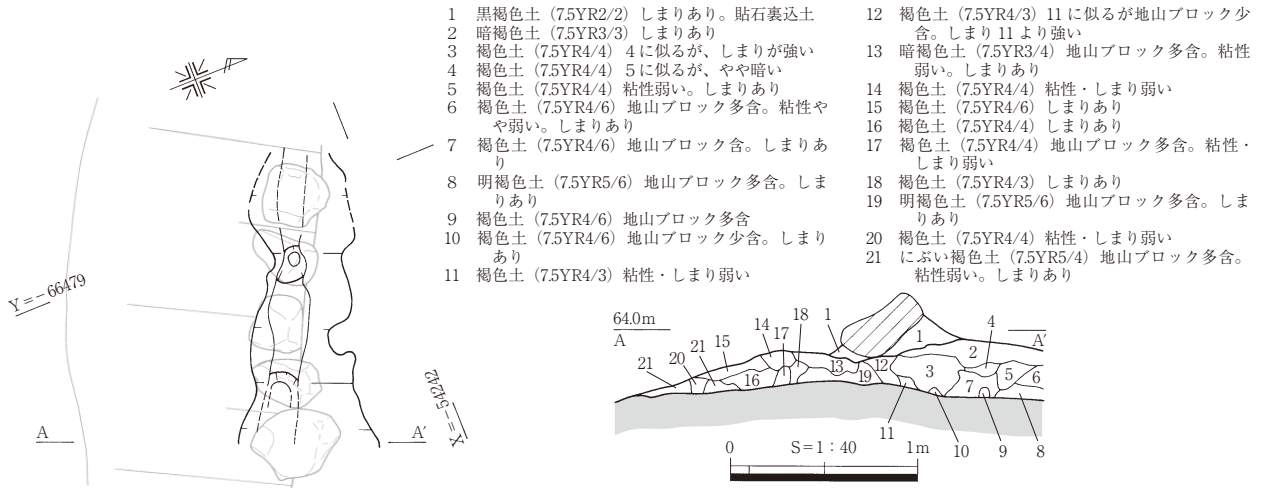
南西隅 a手法が顕著な南側貼石は、西側コーナーに差し掛かると上下2段の小口積みへと変わり、隅部まで続く。一方、西側貼石は、c手法による3段積みであるが、コーナー付近では顕著でなくなり、小礫が目立つ。また南側貼石のコーナー付近に1石ほど斜めに墳丘外へ向く石がある。これは底辺38cm、高さ23cmの三角形をした扁平な石であるが、平らな底辺は盛土上に据えられ、原位置をとどめている。

この石は、突出部を意識したものと見る向きもあろうが、相対する西側には同様の石はなく、また隅の突出も顕著でない。また稜線上に踏石状の石は認められないことから、突出部とはみなしがたい。

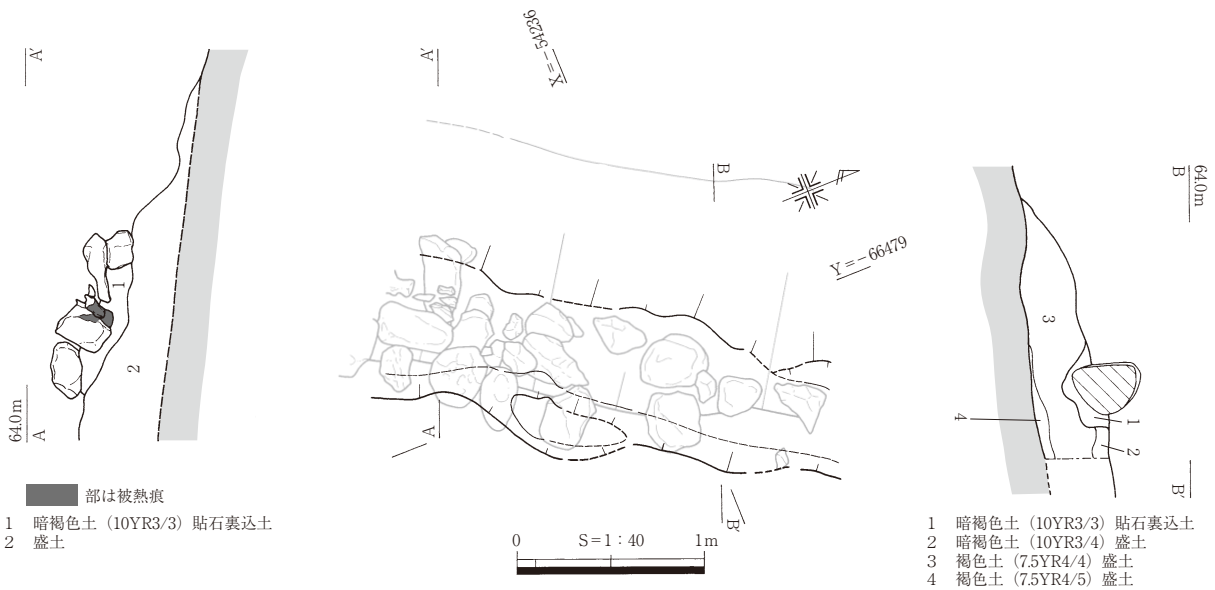
北西隅 西側貼石北端は、c手法で小口を西に向ける。北側貼石西端は前述したように最大の板状安山岩が若干動いたものと見られる。左右の石の間隔等からみて、当初は小口を北へ向けc手法により設置されたものと推測する。

西側張出部 西側貼石の中央部に位置する。墳丘盛土の上端と下端の張り出しはなく、貼石の一部が幅1.5mにわたり、0.4mほど張り出すことにより形成される。仔細に見るとc手法3段積みを用いる西側南半部の貼石が、張出部では、上1段分が張出部の内側をめぐり、下2段分が外側をめぐる。内側の貼石はa手法、外側の貼石はc手法による2段積みである。張出部の上面は平らで、墳頂部より約20cmほど低い。断ち割り部の所見から、後から付加された痕跡は見出せず、墳丘築造の一連の工程の中で、張出部も構築されたものとみられる。また埋葬施設も検出されなかった。西張出部に伴う遺物もないが、張出部の上面を覆う暗褐色土から赤色塗彩を施した土器が比較的多く出土した。

石材 貼石に使用された石材の多くは、船上山溶岩に属す板状安山岩であり、垂角礫、垂円礫といった形状から、船上山山塊に源流を持つ周辺河川の河床礫を用いた可能性が高い。また少量ではあるが、

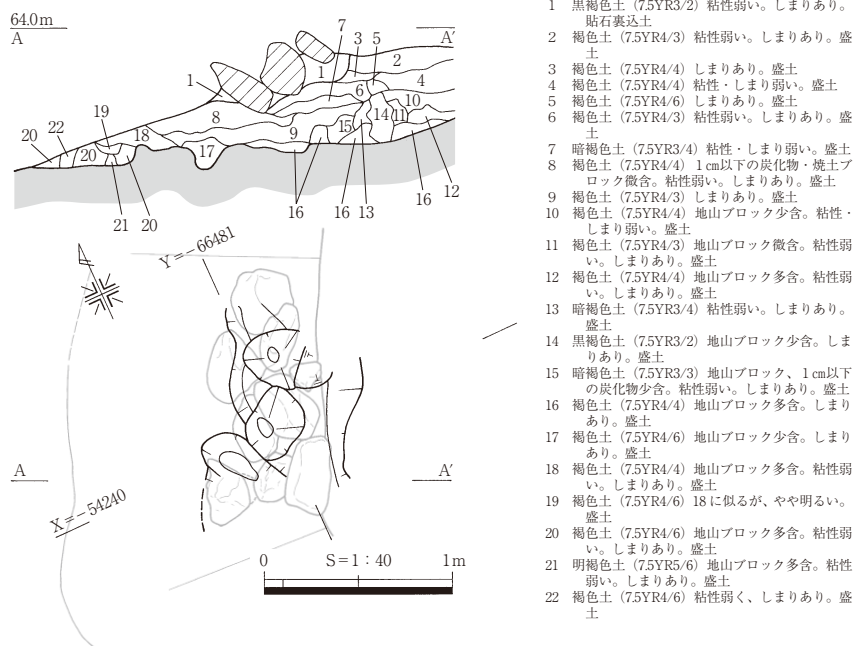


第126図 南側貼石掘方



第127図 西側貼石北半部掘方

デイサイト質凝灰岩も含まれるとのことである(註3)。また、既に述べたように、一部に海岸部から搬入されたとみられる穿孔貝による穿孔を持つ石もある(写真4)。(小山)



第128図 西側貼石南端部掘方

第3節 柱穴

(1) 調査の経緯

昨年度の調査までに4基の柱穴の存在が明らかとなっていた。これらは、盛土下から掘り込まれた第1主体部の墓壙を検出するため、盛土を除去した結果、地山面にて検出したものである。かろうじてP3とP4の一部の断面にて柱穴と盛土との層位的関係の把握が可能であり、柱穴は盛土内から掘り込まれていることや、柱穴が墓壙埋土を掘り込んでいることも確認した。このように柱穴と盛土および墓壙との層位的関係により、柱穴が墳丘墓に伴うことが確実である。こうした経緯で昨年度の概報作成時は、墳丘墓に伴う柱穴は4基であるとして報告を行った。

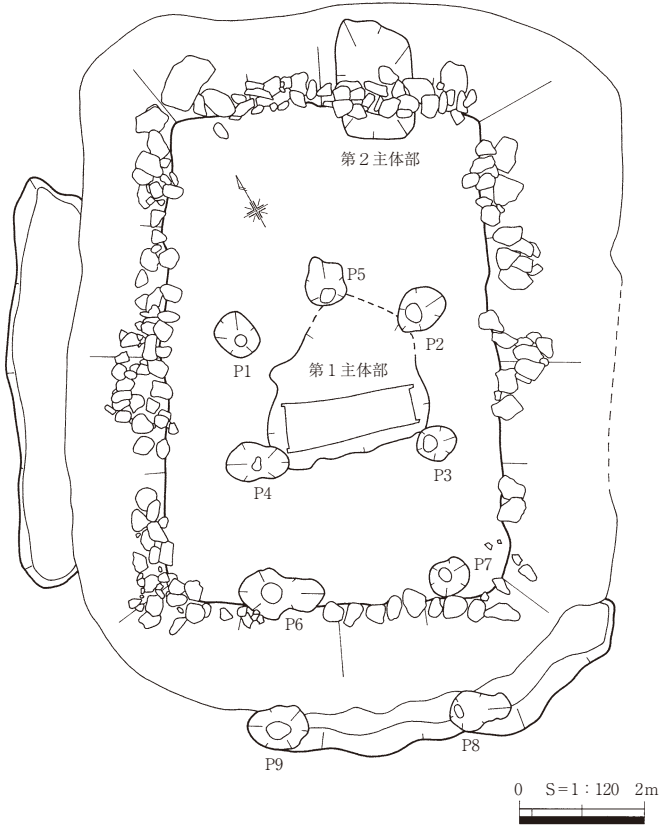
今年度の調査では、昨年度の調査時に性格不明土坑としたものが、柱穴(P5)であることが判明したほか、現地説明会開催後の墳丘の解体に伴う調査で、新たに4基の柱穴が確認され、合わせて9基となった。

また昨年度調査時は柱穴埋土中の立ち上がりを柱痕跡とみていたが、周辺の同時期の竪穴住居跡の柱痕跡と比較すると、土質が全く異なっていた。今年度の調査では、両者が相違する原因を明らかにするため、柱穴埋土の再検討を行った。その結果、柱痕跡と考えた立ち上がりは、柱の抜き取り痕跡である可能性が高いと判断した。このように昨年度の所見は、大幅な変更が加えられることとなった。

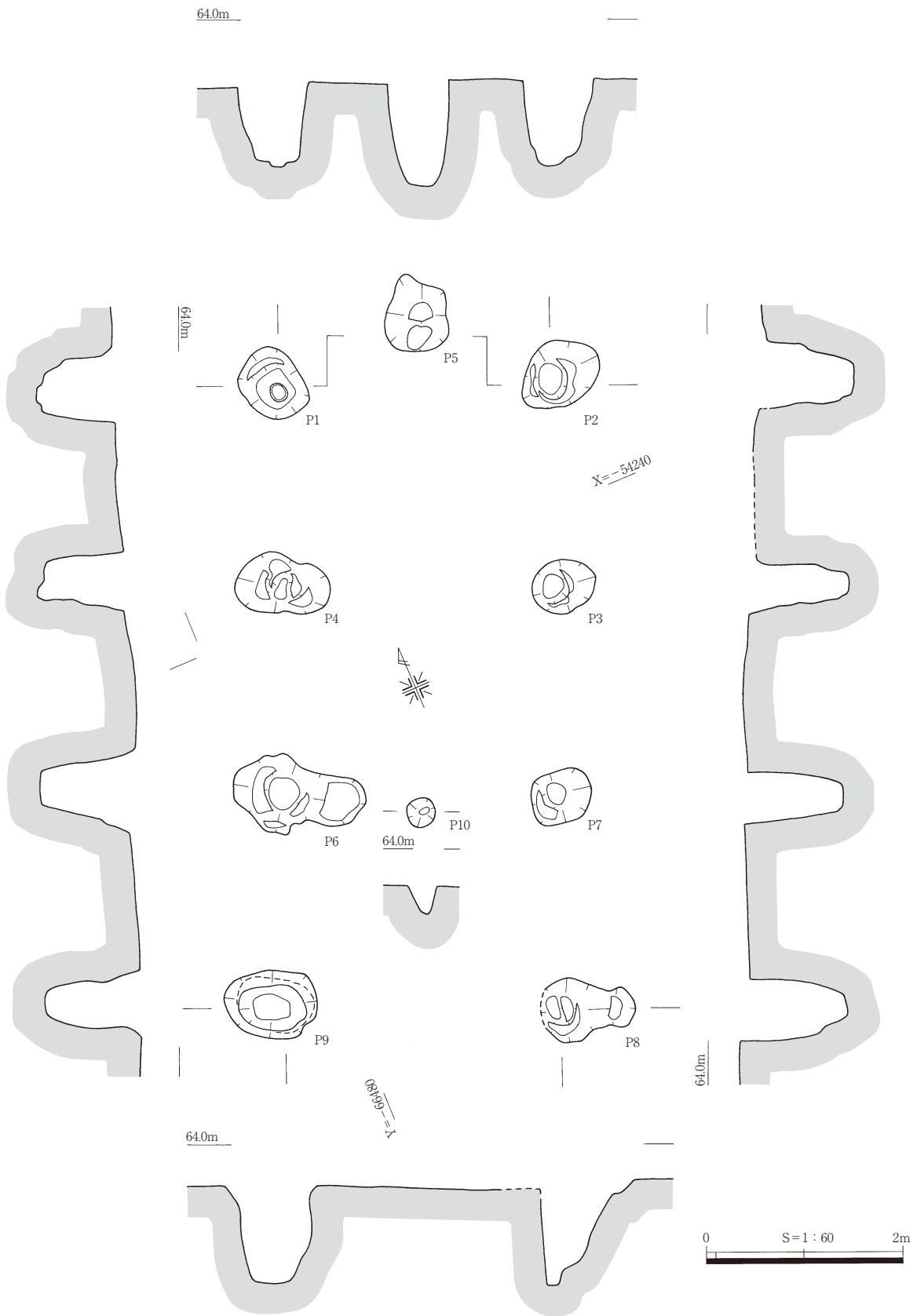
(2) 概要

第1主体部から墳丘墓の南側にかけて、9基の柱穴を検出した(第129・130図)。平面形から1間×3間の独立棟持柱建物のようにも見受けられるが、P5に対応する南側の棟持柱は、慎重に精査を行ったが検出されなかった^(註4)。柱列の並びは整然として規則的であり、掘立柱建物の柱穴と仮定すると梁行2.76m、桁行6.3mの規模で、長軸は座標北に対し22度東偏する。柱穴間距離は、P1-P2間2.76m、P2-P3間2.04m、P3-P7間2.1m、P7-P8間2.16m、P8-P9間2.76m、P9-P6間2.22m、P6-P4間2.04m、P4-P1間2.04mを測る。柱穴底面のレベルは地山の傾斜に沿って北側が20cmあまり低くなるものの、概ね近似値といえる。埋土の断面観察の結果、埋土中に立ち上がるラインは上に行くほどラップ状に広がり、しかも立ち上がりは直線的ではなく、乱れがあることから、柱痕跡ではなく抜き取り痕跡の可能性が高いと判断した。

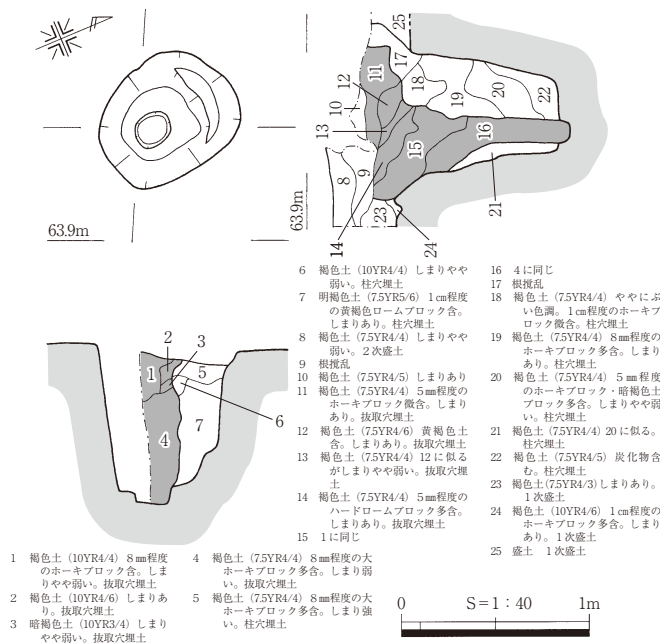
P1(第131図、PL58) 第1主体部の北側で検出した。長軸74cm、短軸60cm、検出面からの深さ94cmを測る。墳丘を除去した地山面にて検出したが、土層の観察から本来の掘り込み面は盛土中であつた。木の根による攪乱のため、掘り込み面の特定はできなかった。本来の掘り込み面からの深さは、105cm以上となる。底面は直径18～20cm、深さ6cmほど一段低く柱痕跡とみられ、柱の直径は20cm程と想定される。



第129図 墳丘墓と柱穴の位置関係



第130図 柱穴列



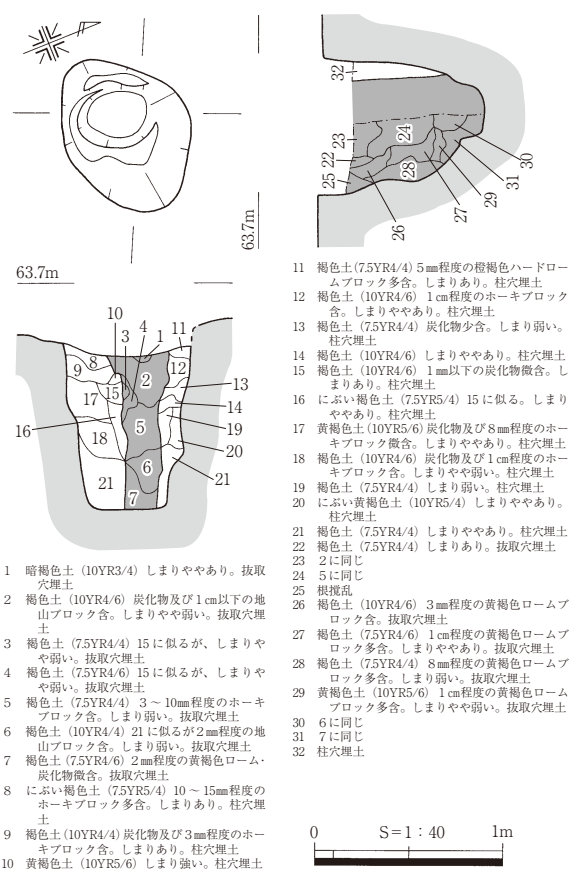
第131図 P1

柱穴の埋土は地山ブロックを多く含む地山掘削土であるが、中央にしまりの弱い部分があり、これを下に追っていくと底面の一段低い部分に続いていた。このしまり具合の違いを手がかりに分層を行った結果、埋土中に立ち上がるラインが認められた。立ち上がり方は直線的ではなく、乱れが生じており、上に行くに従い広がることから、柱の抜き取り痕跡と判断した。抜取穴の掘り込み面は、柱の掘方と同様、木の根の攪乱にさえぎられ不明である。出土遺物は皆無であった。

P2 (第132図、PL.58、写真5) 第1主体部の北東側に位置する。地山面にて検出した。本来上段墓壙と重複する箇所であるが、木の根の攪乱が顕著なため、墓壙の肩の検出ができなかった。このためP2と墓壙との層位的関係は不明である。長軸90cm、短軸67cmを測り、検出面からの深さは88cmを測る。

柱穴掘方埋土は地山ブロックを多く含む地山掘削土である。下半部は比較的しまりが弱い、上へ行くほどよくなっていた。埋土中央に縦方向にしまりの弱い土層の帯が認められた。これを追っていくと、埋土中に立ち上がる線となった。埋土上面において精査を行ったところ、歪な楕円形と見られるプランが検出され、立ち上がりのラインに対応していた。昨年度報告時は、これを柱痕跡と考えていたが、つぶさにみると立ち上がり方は、直線的ではなく、上部がラップ状に広がるなど土層の乱れがあることから、柱の抜き取り痕跡の可能性が高いと判断した。抜取穴の埋土の土質は柱穴埋土のそれとよく似ているが全般的にしまりが弱い。

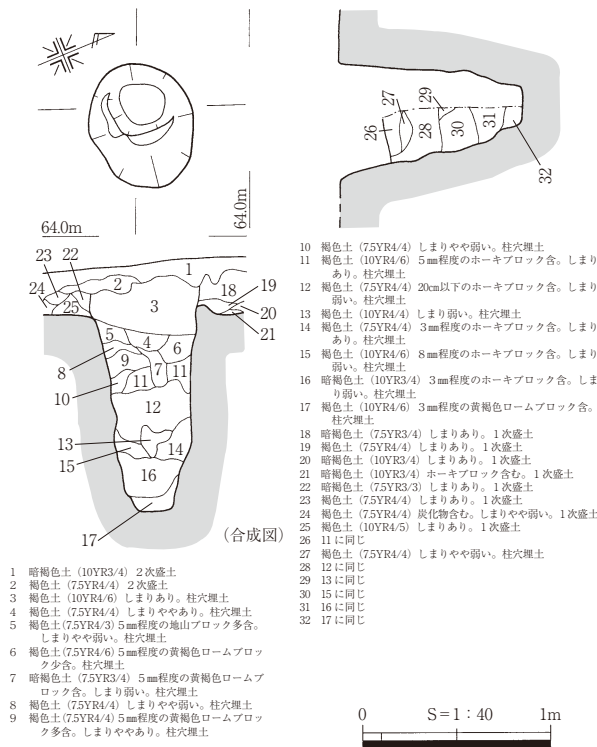
P2底面は直径約20cmほど一段低くなり、柱痕跡とみられる柱の直径を窺い知ることができる。出土遺物は皆無であった。



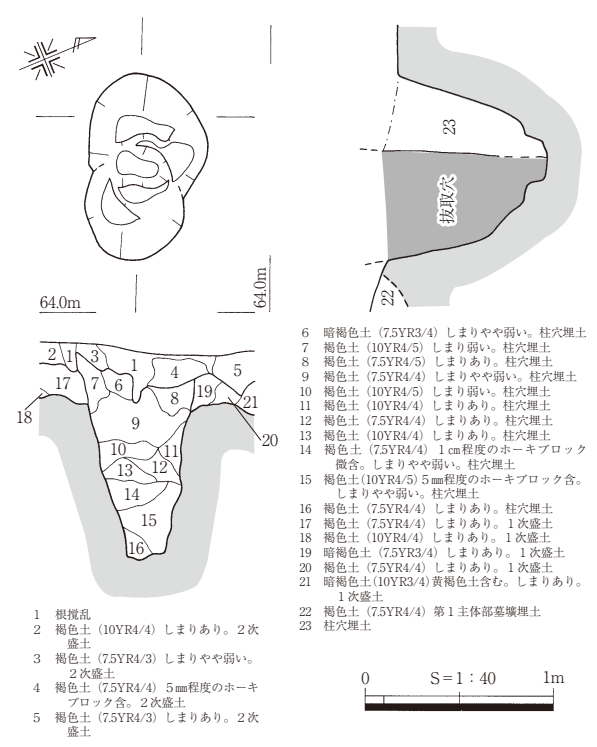
第132図 P2



写真5 P2底面柱痕跡検出状況



第133図 P3



第134図 P4

P3 (第133図、PL.59) 第1主体部の南東側に位置する。一部第1主体部の墓塚と重複するが、P3が墓塚を切る関係にある。このことは掘り込み面からも検証可能である。地山面検出であるが、盛土断面に僅かにかかっていたP3の断面の所見から、P3の掘り込み面は、厚さ30cmの盛土のうち15cmほど盛った面、標高にして約63.7mの面である。後述するように墓塚は地山面から掘り込まれていることから、P3が墓塚掘削の後の盛土開始後、墳丘が完成する以前に掘り込まれていることは層位的に明らかである。なお盛土内の掘り込み面のレベルにおいて平坦面などの作業面は、認められなかった。柱穴は長軸66cm、短軸56cmを測る。検出面からの深さは104cmで、掘り込み面からの深さは116cmを測る。P3は断ち割りを実施した箇所においては、柱の抜き取り痕跡は認められなかった。全般的にしまりのある土であることから、柱穴掘方埋土の断面を示しているものとみられる。底面は直径22cm、深さ10cmほど1段深くなっており、柱があったと見られる。柱穴内から甕の口縁部が出土したが、北

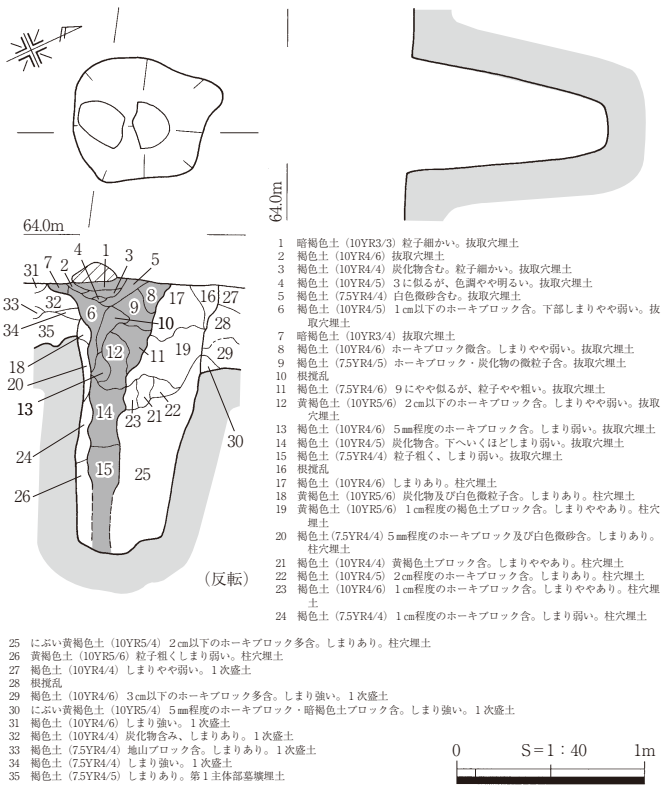


写真6 P4掘り込み面

側3区に隣接する竪穴住居跡SI26出土の甕と接合関係が認められた^(註5)。その他、細片のため図化しては無いが、掘方埋土中から若干の土器が出土した。中には煤が付着するものもある。

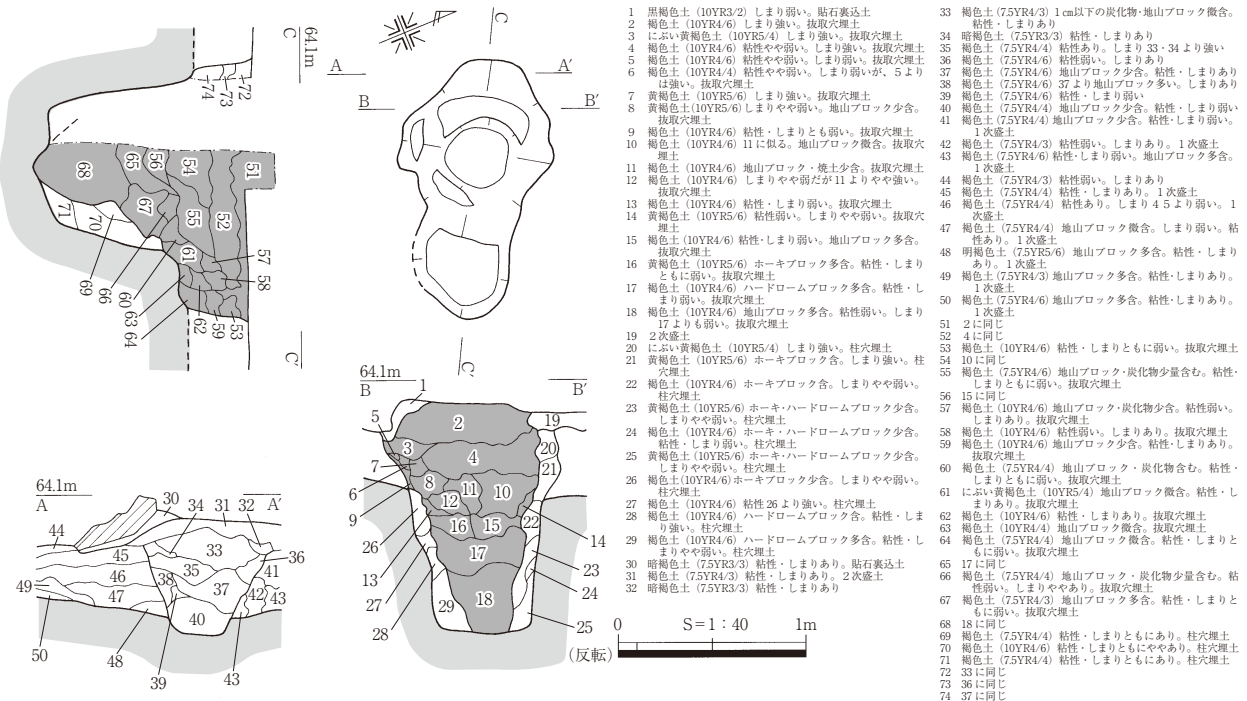
P4 (第134図、PL.59、写真6) 第1主体部の南西側に位置する。一部第1主体部の墓塚と重複し、P4が墓塚を切る関係にある。P3と同様、地山面において検出したが、断面観察の所見から掘り込み面は、標高63.7m付近の盛土中であつた。このことは、平面精査において、柱の掘方は盛土上面では検出されず、盛土を約10cmほど掘り下げ、検出するに至ったこととも整合する(写真

6)。また盛土内には、柱穴の掘削に伴う作業面とおぼしき平坦面は認められなかった。検出した当初は、単独の柱穴とみていたが、掘り下げた結果、中央部が括れ、2基の穴が切りあうことが判明した。このうち東側が新しく、埋土のしまりが弱いことから、抜取穴とみられる。抜取穴を含む柱穴の長軸は99cmであり、本来の長軸は推定70cm、短軸は62cmであった。抜取穴の長軸は推定62cm、短軸52cmほどで、東側へ抜き去られたようである。検出面から柱穴底面までの深さは82cm、本来の掘り込み面からの深さは100cmを測る。柱掘方の埋土は、しまりのある地山掘削土であり、抜取穴の埋土は同様の土質であるが、しまりが弱い。細片のため図化してはいるが、若干の土器が出土した。なお、抜取穴は地山面にて検出したことから、本来の掘り込み面は不明である。



第135図 P5

P 5 (第135図、PL.60) 第1主体部の墓壇北側に位置する。昨年度の調査時は埋葬施設北側の性格不明土坑としたもので、概報にもそのように記載した。今回の調査で再検討を行った結果、柱穴であることが判明した。検出は地山面であったが、本来の掘り込み面は盛土面からであり、現状では盛土上面まで立ち上がりを見せる。これは墳丘墓の北側墳裾に流土の堆積が比較的多かったことから、柱穴掘削後の2次盛土が、既に流失したことによるものと推察する。また土層断面の所見から、P5の掘方は南からのびる第1主体部上段墓壇の埋土を切っていた(第142図)。このことは、墓壇が地山か



第136図 P6

ら掘り込まれていることと、P5がその上の盛土面から掘り込まれていることとも整合する。長軸68cm、短軸64cm、検出面からの深さ84cmを測る。盛土面からの深さは112cmであった。抜取穴上面に人頭大の円礫がみられたが、この石は抜取穴の最上層に堆積した暗褐色土の上にあることから、抜取穴のくぼみに2次的に落ち込んだものと判断した。埋土は、しまりの強弱で大別可能であり、中央部のしまりが弱い部分の立ち上がり、上半部でラップ状に広がり、立ち上がりの線自体が直線的でないことから、抜き取り痕跡と判断した。抜取穴埋土中から外面に煤が付着した土器の細片が出土した。

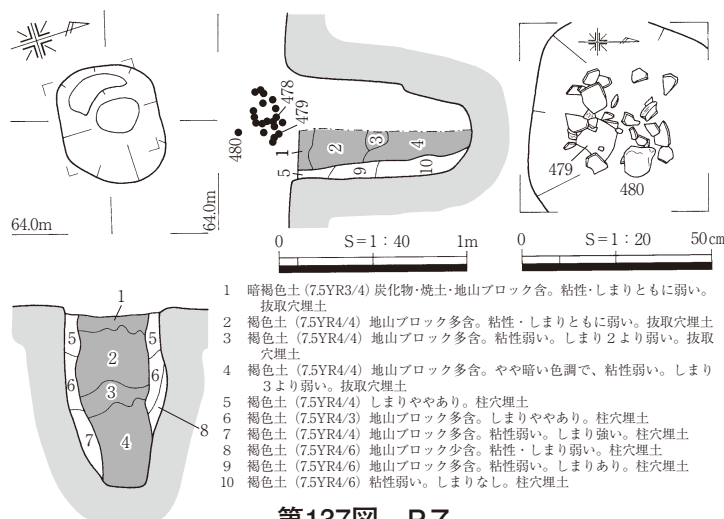
P6 (第136図、PL.60・61) P4の南、墳丘墓の南西隅付近に位置する。墳丘の解体に伴う南側貼石の断ち割り調査の折、トレンチ内の地山面にて検出した。本来の掘り込み面は、標高およそ63.8m付近の盛土内である。柱穴は長軸138cm、短軸82cm、地山面からの深さ78cmを測る。盛土内の掘り込み面からの深さは108cmであった。柱穴本来の埋土は、しまりのある地山掘削土であったが、埋土の中央はしまりが弱い。その境のラインを追うと、斜め上方に立ち上がっていくことから、抜き取り痕跡とみられる。

盛土上面において、抜取穴の輪郭を検出した。抜取穴は長軸78cm、短軸70cmの不整形を呈す。その形状から、南東側へ抜き取ったものとみられる。

西側の南北断面(A-A')には貼石がかかっており、貼石の掘方が柱穴埋土を覆う2次盛土を掘り込み、貼石が据えられていた。また東側の南北断面(B-B')の所見から、2次盛土上面から掘り込まれた柱の抜取穴は、貼石掘方に切られていた。このことから、柱は2次盛土の後、つまり墳丘が完成した後に抜き取られ、その後貼石の設置が行われたことが層位的に明らかである。

遺物は、掘方埋土及び抜取穴埋土中から若干の土器が出土した。

P7 (第137図、PL.61) P6の東側、墳丘墓南東隅付近に位置する。P6と同様、墳丘の解体に伴い貼石および盛土を除去した地山面にて検出した。柱穴の長軸67cm、短軸53cm、検出面からの深さ96cmを測る。また抜取穴の長軸は52cm、短軸37cmを測る。P7直上の盛土中から土器が比較的まとまって出土した。盛土から出土する土器に比べ破片が大きく、集中して出土することから、P7に伴う土器の可能性が高い。これが妥当であれば、他の柱穴と同様本来の掘り込み面は盛土内と推察される。また掘方を検出した同一面で、抜取穴の輪郭も検出した。掘方の埋土は、しまりのある地山掘削土である。埋土の中央部は同様の土質であるが、しまりが弱くその境のラインがゆるく屈曲しながら上方へ立ち上がっていた。このことから、他の柱穴と同様抜き取り痕跡であると判断した。抜取穴の形状から、南東側へ抜き去ったとみられる。出土遺物は上述したもの他、掘方埋土や抜取穴埋土中から土器の細片が出土した。細片のため図化していないが、甕胴部最大径付近まで内面ヘラケズリが及ぶものや、甕胴部最大径付近に列点文を上下2段に施すものがある。墳丘南半部に散漫に土器が分布する状況の中、ここに比較的まとまった出土がみられる。出土レベルはややばらつきがあり、接合する破片は認められない。抜き取り後のくぼみに落ち込んでいたもの



第137図 P7

から、南東側へ抜き去ったとみられる。出土遺物は上述したもの他、掘方埋土や抜取穴埋土中から土器の細片が出土した。細片のため図化していないが、甕胴部最大径付近まで内面ヘラケズリが及ぶものや、甕胴部最大径付近に列点文を上下2段に施すものがある。墳丘南半部に散漫に土器が分布する状況の中、ここに比較的まとまった出土がみられる。出土レベルはややばらつきがあり、接合する破片は認められない。抜き取り後のくぼみに落ち込んでいたもの

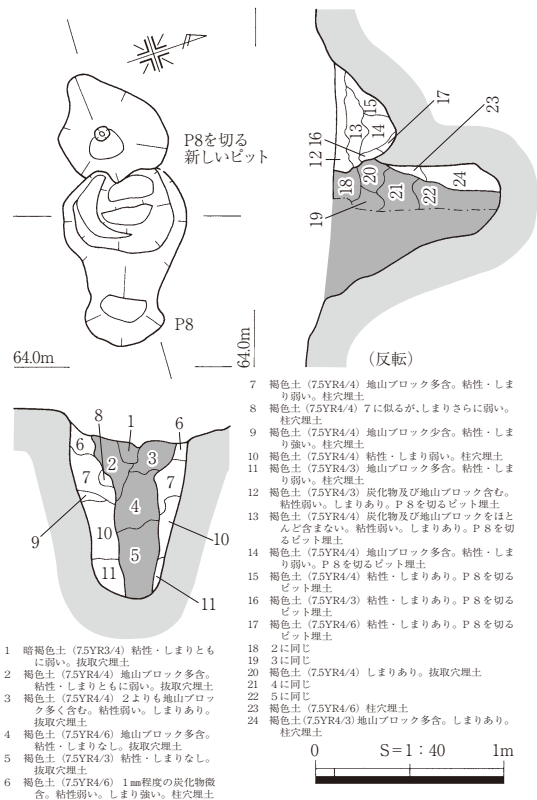
と見られるが、人為的な投げ込みか、自然堆積による落ち込みかという判断は困難であった。

P 8 (第138図、PL.62) P 7の南側、柱列の南東隅にあたる南側区画溝の中に位置する。西側は別の小ピットに切られる。溝の埋土を除去した後、溝の底の地山面にて検出した。昨年度の調査時既に検出を終えていたが、墳丘墓築造以前の落とし穴と認識していた。このため昨年度の調査では検出のみにとどめていた。今回の調査においてP 7を検出するに至り、柱列の延長上に位置することから、柱穴の可能性が高くなった。調査の結果、長軸90cm、短軸65cmを測る柱穴と確認された。検出面からの深さは1mである。本来の柱穴埋土は地山ブロックを多く含む地山掘削土で、比較的しまりがある土であるが、中央部はしまりが弱く、その部分が埋土中への立ち上がりとして認識された。直線的に立ち上がり、上部でラップ状に開くことから、抜き取り痕跡と見られる。

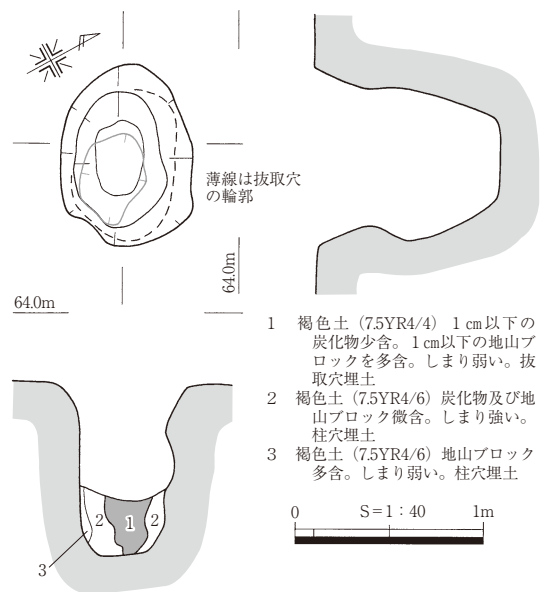
抜き取りの平面検出はできなかったが、P 8の平面形が東側へ大きく張り出し、この部分の断面がスロープ状を呈する。このことから、P 8の東半部の形状は抜き取り穴の形状を示すものと見られ、P 8本来の形状は直径65cm前後の楕円形で、垂直に近い角度で落ち込む形状であったとみられる。出土遺物は図示した482・483以外に、掘方埋土及び抜き取り穴から若干の土器の細片が出土した。底面の標高は62.78mであり、柱穴列北端のP 2底面の標高は62.5mであることから、東側柱列の底面における比高差は、南側が28cmほど高い。

P 9 (第139図、PL.62) P 8の西側、柱列の南西隅にあたる南側区画溝の中に位置する。長軸96cm、短軸70cm、深さ98cmを測る。当初柱穴と気づかず検出が遅れ、検出時にはかなり埋土が下がっていた。形状は他の柱穴に比べやや特異で、北から東側にかけて壁面がオーバーハングする。埋土中にて柱の抜き取り穴の輪郭を検出した。抜き取り穴は長軸49cm、短軸34cmで底面に達していた。出土遺物は皆無であった。底面の標高は62.61mで、柱穴列北端のP 1底面の標高は62.5mであることから、西側柱列底面における比高差は、南側が11cmほど高い。

P 10 (第130図) 長軸30cm、深さ28cmの浅い小ピットである。盛土除去後の地山面にて検出したが、掘り込み面も地山とみられる。埋土は暗褐色土の単層である。P 6とP 7の中間に位置するが、埋土や穴の規模・形状が全く異なり、掘り込み面も異なるとみられることから、墳丘墓築造以前のピットとみられる。出土遺物は皆無であった。



第138図 P 8



第139図 P 9

P 10 (第130図) 長軸30cm、深さ28cmの浅い小ピットである。盛土除去後の地山面にて検出したが、掘り込み面も地山とみられる。埋土は暗褐色土の単層である。P 6とP 7の中間に位置するが、埋土や穴の規模・形状が全く異なり、掘り込み面も異なるとみられることから、墳丘墓築造以前のピットとみられる。出土遺物は皆無であった。

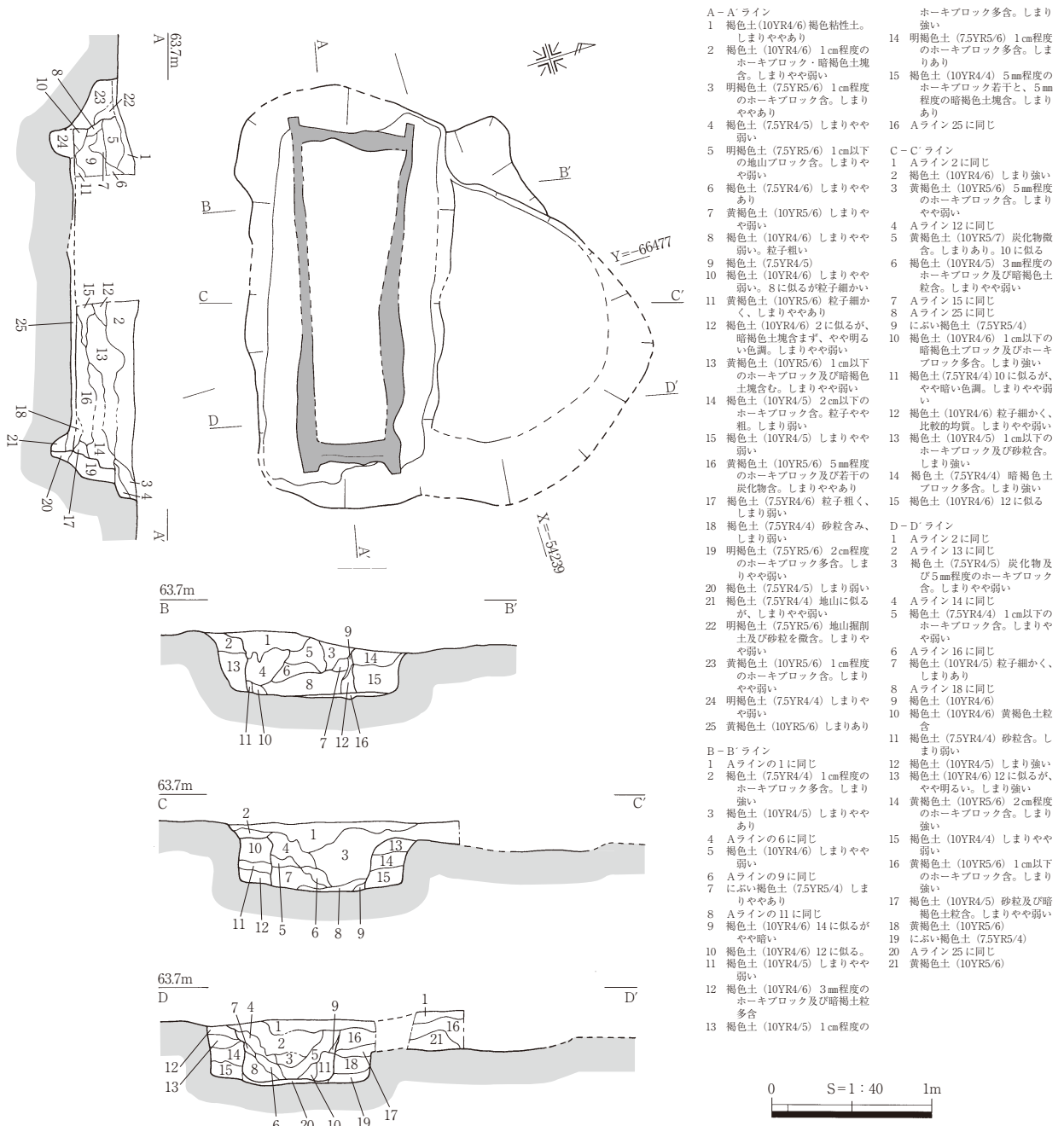
(小山)

第4節 埋葬施設

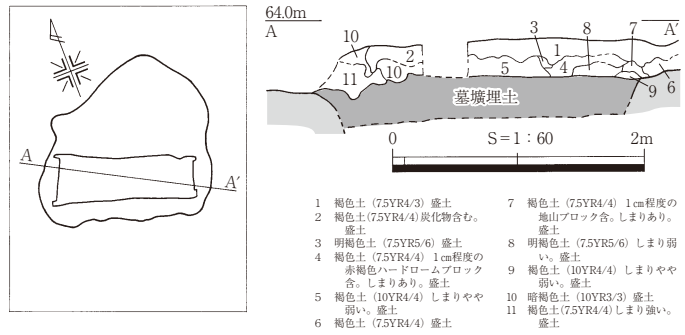
埋葬施設は2基検出した。墳頂部ほぼ中央に位置する木棺墓を第1主体部、墳丘北東部の貼石直下に位置する土壙墓を第2主体部と呼称する。第2主体部は、今年度の調査の終盤、貼石の調査の折に新たに検出された。両主体部ともに墓壙は地山面から掘り込まれており、盛土は2基の埋葬が終了した後の施工であることが層位的に明らかである。したがって2基の埋葬施設の先後関係は、重複関係になく不明である。いずれにしても、墳丘内における両者の占める位置的關係からみて、第1主体部がこの墳丘墓の中心主体であることは明らかである。いずれも棺内への副葬品は皆無であった。

(1) 第1主体部(第140～142図、PL.64～69)

墓壙 地山面にて検出した長軸2.62m、短軸2.54mの片側二段墓壙である。長さ2.62m、幅1.2mの長方形土坑が下段墓壙にあたる。地山面からの深さは52cmである。その北側に上段墓壙にあたる不整形



土坑が取り付く。上段墓壙は地山面からの深さが僅か8cmと浅い。土層断面の所見から、墓壙の掘り込み面は地山であり、墓壙の上面を盛土が覆う状況が、墓壙南北断面(第142図)と東西断面(第141図)の東側の2箇所を確認された。このことから埋葬が終了した後、盛土が開始されたことが明らかである。墓壙埋土と盛土の峻別は、土質的にほぼ同じである

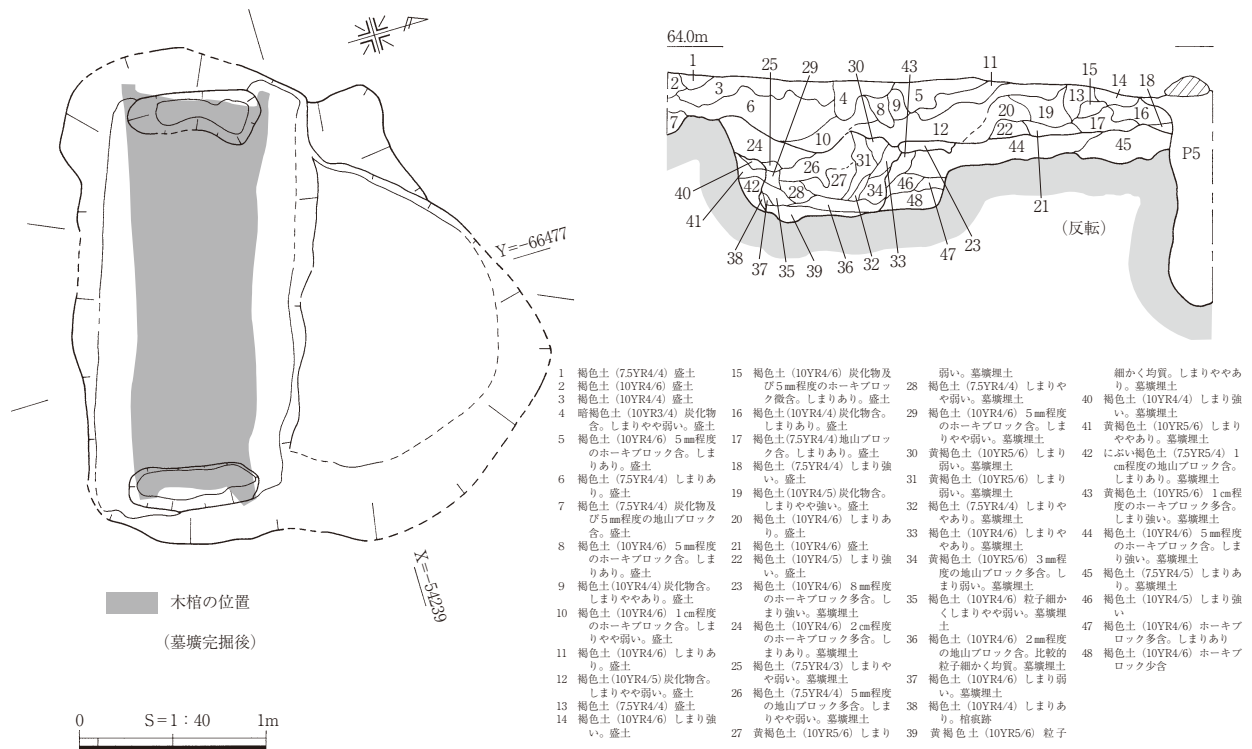


第141図 第1主体部墓壙と盛土の関係

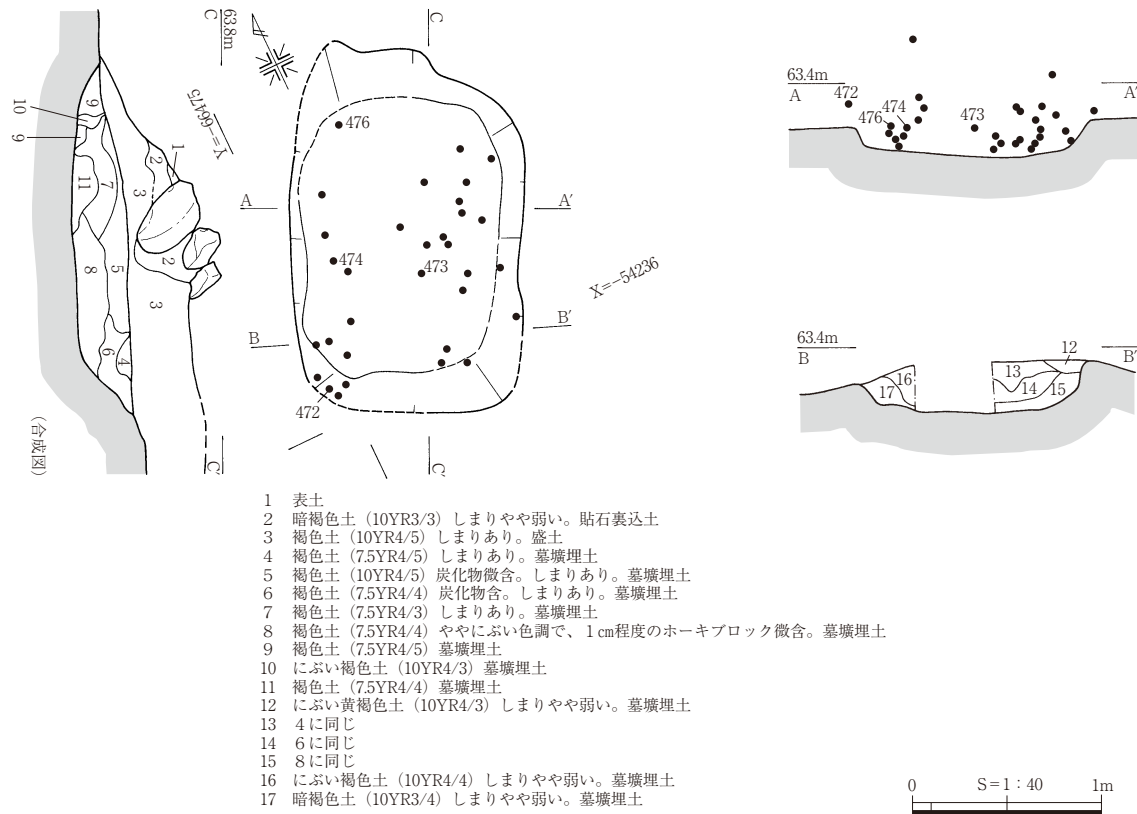
ことから困難であったが、概ね墳丘盛土はしまりがあり、墓壙埋土はしまりがやや弱い傾向が窺えた。これを手がかりとして分層を行うと、棺蓋の腐朽に伴う陥没で、墓壙埋土及び盛土が棺内に落ち込んだ状況が窺えた。墓壙埋土から若干の土器の細片が出土したが、混入品と見られる。

木棺 下段墓壙内で長軸2.03mの組合式木棺の痕跡を検出した。両小口はともに小口穴を伴い、長側板が、小口板を挟み込む形態である。西小口の幅は外法で78cm、東小口幅62cmを測る。両小口における棺底のレベル差は顕著ではない。昨年度調査までの段階で、墓壙内の断ち割りの所見から木棺墓であることが窺えたため、墓壙埋土の掘り下げを慎重に行うと、木棺長側板のしまりのある裏込土と、比較的しまりが弱い棺内流入土との境目が直線的なラインとして検出された。小口側は、ラインが直線的とはならないため、小口の裏込土と棺内流入土の境目なのか、あるいは単なる流入土の単位の違いなのか、判別が困難であったが、結果的には前者であり、小口の裏込土はしまりの弱い土であった。

西側小口穴は幅20cm、長さ71cm、深さ12cmであり、東小口穴は同様に20cm、69cm、10cmを測る。棺内外への副葬品は皆無であり、赤色顔料の散布も見られなかった。西側の棺幅が幅広となることから、被葬者は西頭位で埋葬されたとみられる。棺内および下段墓壙の埋土は全て水洗を行ったが、棺内に流入した土器の細片が若干出土したのみであった。



第142図 第1主体部(2)



第143図 第2主体部

(2) 第2主体部(第143図、PL.70・71)

墓 壇 墳丘北東側の貼石直下にて検出した^(註6)。長軸1.9m、短軸1.2mの小判形を呈し、両小口側の立ち上がりはゆるく、側面は急な角度で立ち上がる。地山面からの深さは28cmである。底面は平坦であるが、木棺痕跡が認められないことから土壇墓とみられる。墓壇の掘り込み面は検出面と同じ地山面であり、埋葬が終了した後、墓壇埋土を盛土が覆い、さらに貼石が設置されていた。棺内への副葬品は皆無であるが、墓壇検出面付近にて土器が比較的まとまって出土した。出土した土器はいずれも細片化しており、完形品は皆無であった。また接合関係も認められなかった。土器の出土が希薄な墳丘墓北半部の中にあつて、特異であることから、第2主体部への供献土器とみられる。また第1主体部と同様、墓壇埋土の水洗を行ったが、土器の細片が若干出土したのみであった。(小山)

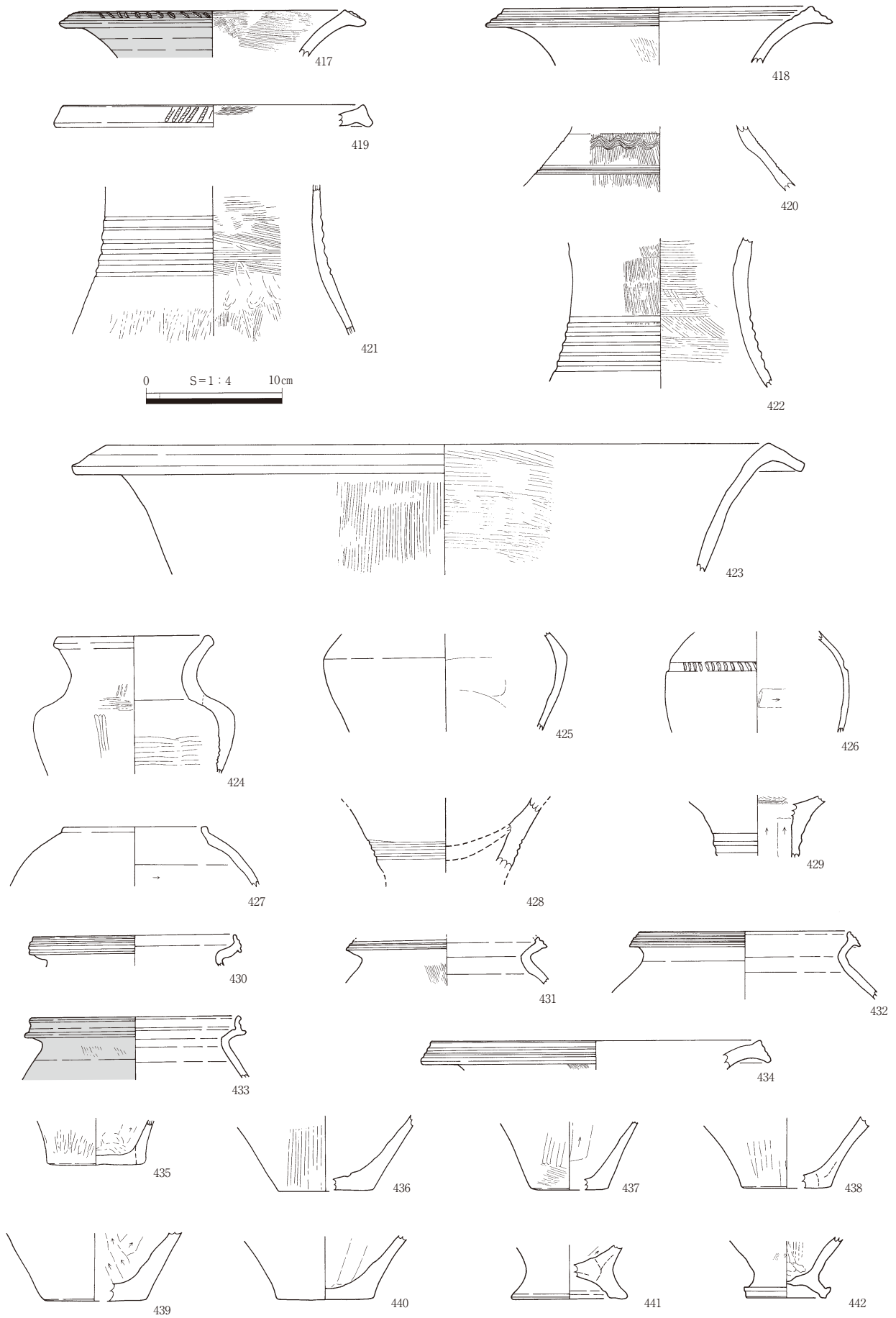
第5節 出土遺物

(1) 墳丘墓出土土器の概要(第144図)

墳丘墓の各所から比較的多くの土器が出土した。接合関係は若干認められるが、大半の土器は接合しない細片であり、完形に復元できるものは皆無であった。総数は定型コンテナ(内法590×386×207mm)13箱分である。器種は壺、甕、高坏など多岐にわたるが、甕の占める比率が高いように見受けられる。内外面に煤等が付着した使用痕を残す破片も少なくない。赤色塗彩した土器は33点であるが、墳丘墓出土土器全体に占める割合は少ない。このうち墳頂部及び墳丘墓周辺出土のものが23点あり、半数以上を占める。このほか、盛土内から6点、西側区画溝から2点、柱穴から1点、第1主体部から1点の赤色塗彩した土器が出土した。図化に当たっては、出土地点別に図化可能なものを抽出した。器種や出土地点によっては僅少なものもあり、その場合細片でも極力図化を行った。



第144図 墳丘墓出土遺物分布図



第145図 墳丘墓出土遺物(1)

(2) 出土土器

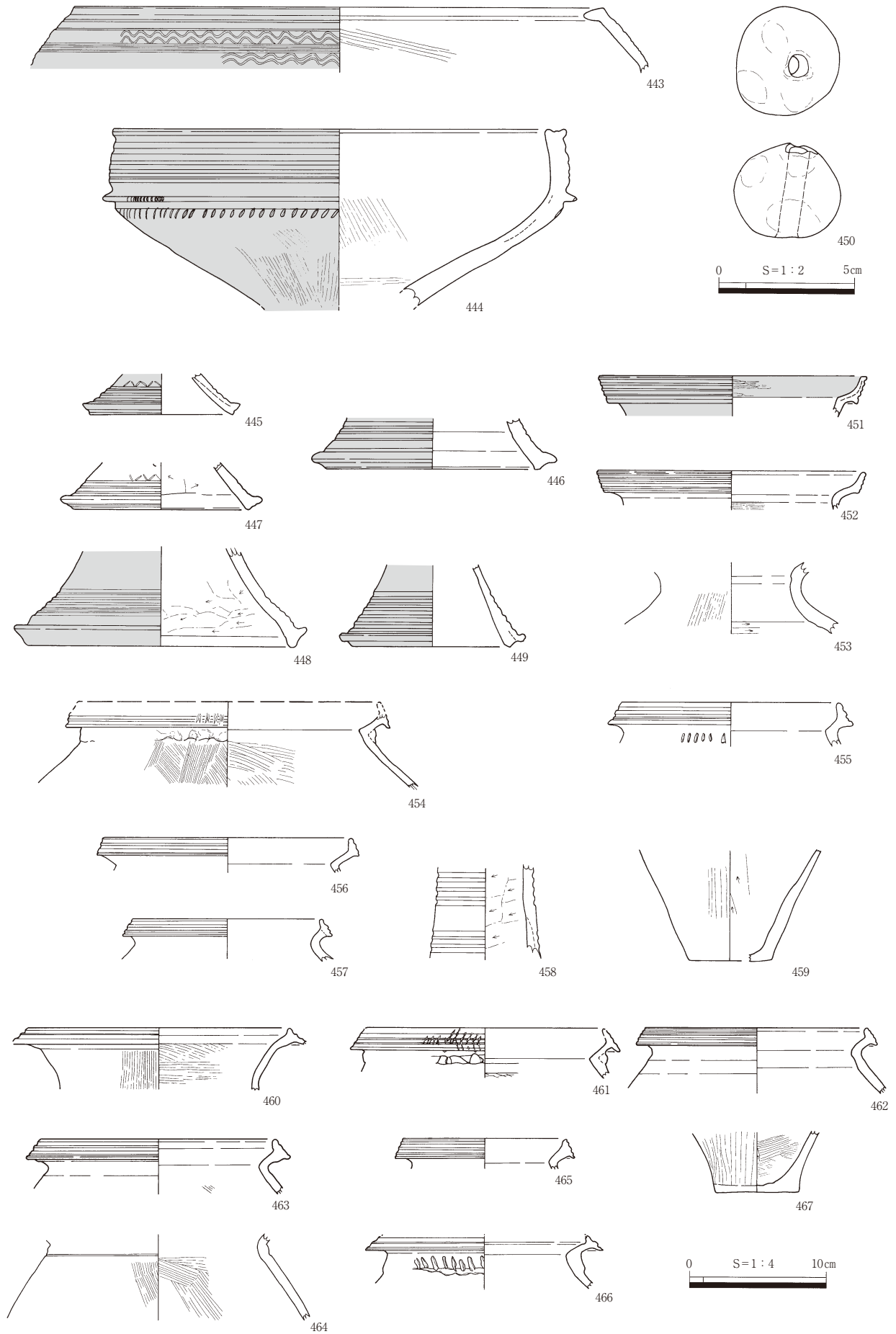
墳頂部および墳丘墓周辺の土器(第145・146図417～453、PL.110～113) 表土や、盛土上面を覆う暗褐色土中から、転落石に混じって土器片が出土しているが、原位置を保つものはない。数量的には墳丘墓各所から出土した土器の中で最も多く、また壺、甕、高坏、脚付の壺など器種も豊富である。また後述する絵画土器も墳丘墓を覆う表土及び流土からその大半が出土した。土器の分布は、全般的に高所側に当たる南側で多く出土し、北側に少ない傾向が窺える。しかし出土地点にまともではなく、分布は散漫としている。また墳丘斜面部からも出土しており、大部分の土器は、墳頂部から転落したものと見られる。接合関係はあまり認められないものの、細片のため図化していないものも含め、南と西の墳丘裾間や墳頂部間等で若干認められた。

417～429・434・453は壺である。423のような大形のものもみられるが、中・小形のものが多い。口縁部の形態は下垂する口縁部の端面に凹線を施すものが多い。418はさらに口縁部内面にも3条の凹線文を施す。420の壺肩部は上下に4条の凹線文を施し、その間に波状文を施す。427は無頸壺であるが、口縁部外面の凹線文はみられない。424～426は小形の壺である。424は胴部内面に横方向のハケメを施す。ハケメというよりはむしろ櫛状工具により、削り取ったというほうがふさわしい。北西隅と西裾の接合例である。426は墳丘南西隅の斜面出土のものと墳丘裾出土のものが接合した。430～433は甕である。いずれも小片からの復元であるが、中ないしは小形の甕とみられる。いずれも頸部貼付突帯を持たないが、細片のため図化していない甕の破片の中には、若干ながら頸部突帯をもつものもある。434・437～440は墳丘外出土であるが、墳丘からの流土中出土のものである。

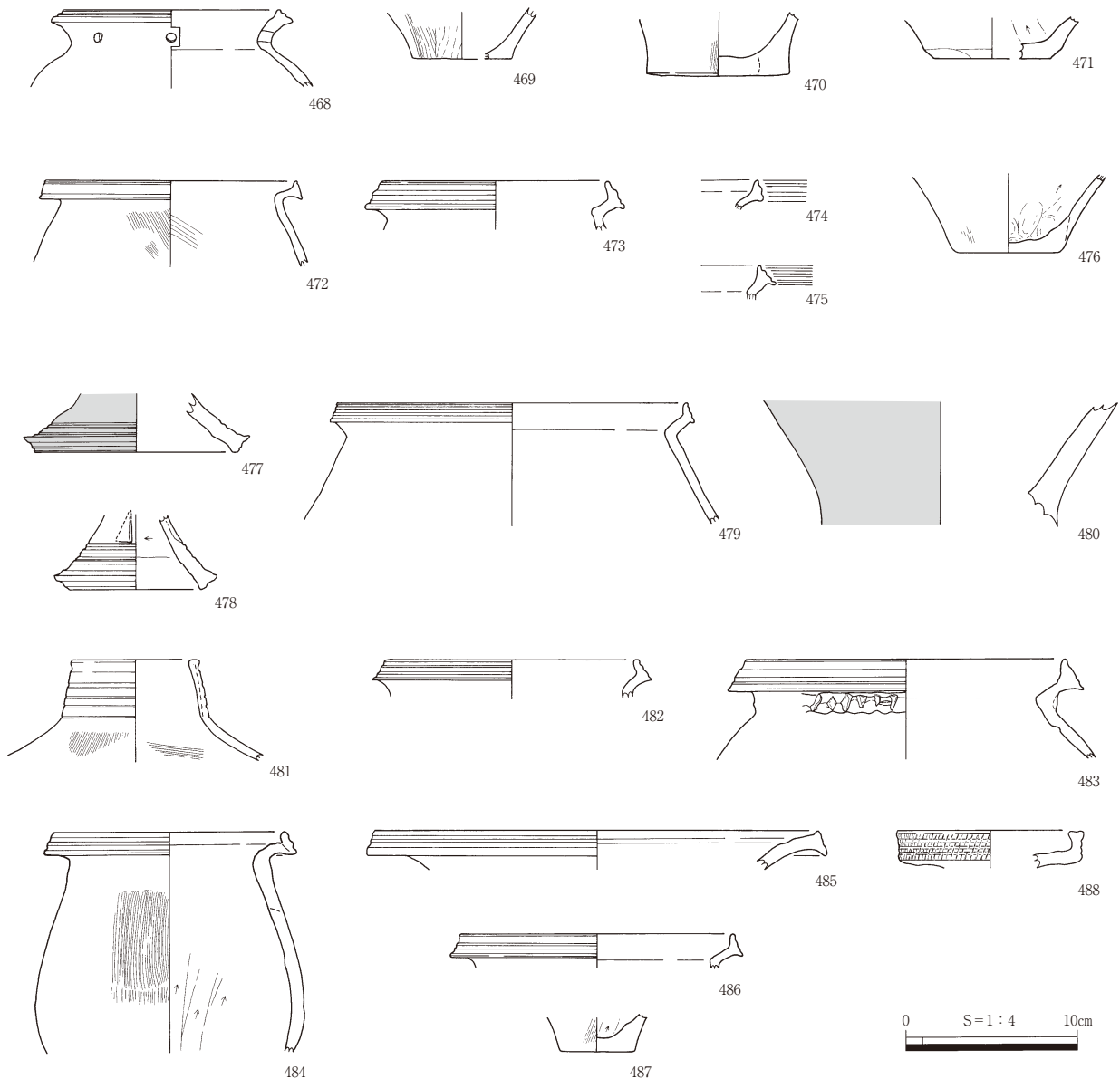
431は墳頂部で出土した土器の接合例であり、436は墳丘西裾にて近接して出土した土器の接合例である。441と442は甕等の脚部と思われるが、いずれも脚の端面の凹線文は認められない。443は大形の無頸壺か鉢とみられる。444は外面に赤色塗彩を施す大形高坏の形状を呈するが、直立する口縁部に注口部がついていたとみられ、補強粘土の一部が残存する。大形で加飾性に富み、赤色塗彩を行うといった特徴から、注口付きの脚台付鉢形土器として括られる範疇に属すといえよう^(註7)。445～449は脚部であるが、いずれも脚裾部しか遺存しない。449は墳丘外の流土中からの出土である。450は土玉である。南側区画溝東端の上部を覆う暗褐色土から出土した。また451～453のように、若干ではあるが、やや時期が下るものもある。甕451・452はいずれも弥生時代後期中葉(V-2)のものとみられる。

盛土内出土土器(第146図454～459、PL.111～113) 盛土内からも多くの土器の細片が出土した。平面的な分布は墳丘の南半部に偏っており、墳頂部の土器の出土傾向と一致する。南半部に偏在する理由は定かでない。出土レベルは、標高63.7～63.8mの盛土中位よりやや上からの出土が多く見受けられるが、墓壙検出面に近い盛土下部からの出土例も見られる。出土遺物は土器の細片のほか、サヌカイトの剥片等も出土していることから、墳丘墓築造以前の遺物が盛土内に混入したものとみられる。

出土土器の大半を占めるのは甕であるが、若干ながら高坏もみられる。接合するものは少なく、盛土内出土の甕の破片どうして接合した例があるが、細片のため図示してはいない。図化した454～457は甕である。いずれも残存率1/8以下の小破片からの復元であるが、いずれも中形の甕とみられる。454の頸部突帯は篋状工具による連続刺突を施した後、ヨコナデを行う。口縁端部を欠くが、凹線を施したのちキザミを施す。南側区画溝出土の461と接合し、同一個体である。455は頸部に篋状工具による連続刺突を施すが、貼付突帯は顕著ではない。456は外面に煤が付着する。458は高坏の脚



第146図 墳丘墓出土遺物(2)



第147図 墳丘墓出土遺物(3)

部とみられる。筒部の凹線文は、浅く幅広の沈線状を呈する。

区画溝出土土器(第146図460～467、PL.112・113) 溝埋土中からも若干の土器が出土した。西側区画溝の南端付近でやや土器が多く出土するものの、概して小片が分散して出土する傾向といえよう。

明確なまとまりを持つものではなく、埋土中から破片となって出土していることから、すべて墳頂部から転落したものと判断される。西側区画溝出土の土器は、462～464・467である。また細片のため図化していないが、溝内で接合関係が認められるものが2例ある。

南側区画溝出土の土器は、460の壺と461・465・466の3点の甕である。461は前述のとおり、盛土内出土の454と接合した。465は小形の甕で、口縁部外面に煤が付着する。466は頸部貼付突帯をもつ中形の甕で、頸部突帯には篋状工具による連続刺突を行った後、ヨコナデを施す。

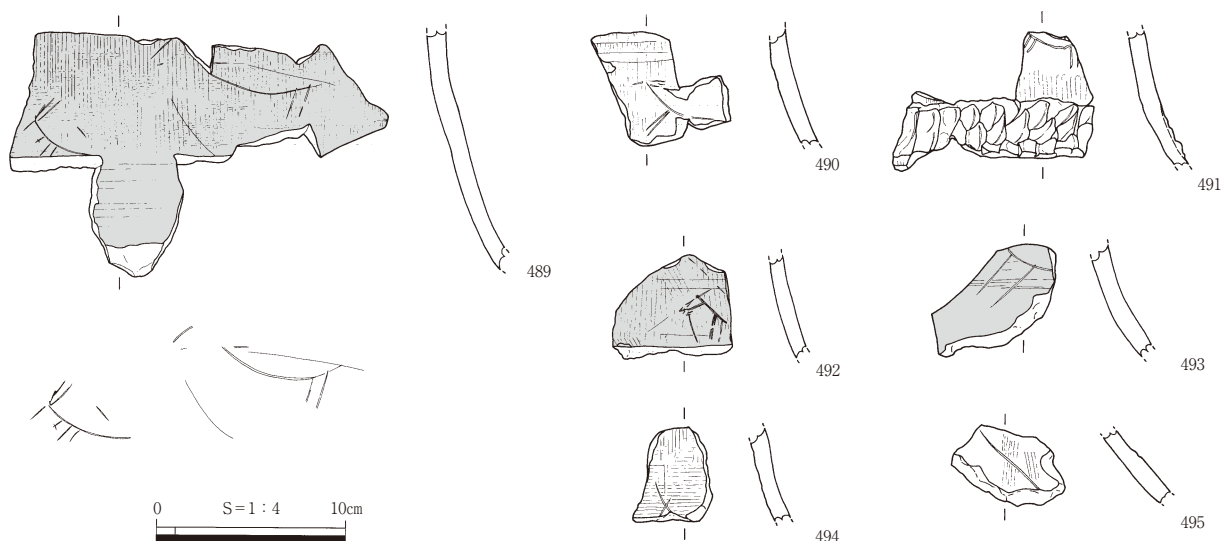
貼石裏込土内出土土器(第147図468～471、PL.112・113) 貼石を据えるための掘方埋土中から約30点の土器片が出土した。いずれも細片であり、図化可能なものは468～471のわずか4点であった。468は南西隅の貼石掘方から出土した小形の壺口縁部片である。円孔が2箇所認められるが、器壁の摩滅が著しく、内外面の調整は不明である。469～471は壺か甕の底部である。

第1主体部出土土器 いずれも細片であり、図示できる遺物はなかった。また、棺内流入土と下段墓壙の埋土の水洗によって出土した若干の土器も、摩滅が顕著であることから、棺蓋の腐朽による陥没に伴い、棺内に流入したものとみられる。

第2主体部出土土器(第147図472～476、PL.112・113) 全般的に土器の分布がまばらな墳丘北半部にあつて、第2主体部周辺に比較的土器がまとまって出土した。層位的には、地山に近い高さの墓壙上面もしくは墓壙埋土上層からの出土であることから、第2主体部上への供献土器の可能性が高いと見られる。土器は盛土に覆われていたが、いずれも細片で接合関係はない。したがって少なくとも盛土が開始されるまでには、すべて破片となり、同一個体の破片が散逸した状態であったとみられる。器種は中・小形の甕が目立つ。口縁端部は上下に拡張し、2ないしは3条程度の凹線文を施すが、頸部貼付突帯をもつものはみられない。472と473はいずれも口縁部1/8以下の細片からの復元である。472と475は第2主体部からやや離れて出土したが、いずれも地山付近からの出土であることから、第2主体部に伴う土器であった可能性がある。

柱穴出土土器(第147図477～488、PL.110～113) 柱穴の掘方および抜取穴から若干の土器が出土した。いずれも細片であるが、器種が判明するものには、壺、甕及び高坏がある。このうち図化可能なものを図示した。477はP6掘方埋土からの出土であり、外面赤色塗彩を施す。478～480はP7上面からの出土であるが、抜取穴へ落ち込んだものとみられる。479の甕は口縁部1/8程度の小破片からの復元であるが、中形の甕とみられる。頸部突帯はない。内外面の摩滅が著しく、調整は不明である。478も摩滅が顕著であるが、脚部の透かしは貫通しない。481～483はいずれも抜取穴出土のもので、481のみP6出土で、他の2点はP8出土のものである。481は直口壺で、口縁部が垂直気味に立ち上がる。他の2点は中・小形の甕である。483の頸部貼付突帯には、篋状工具による連続刺突を施す。摩滅が顕著なため、内外面の調整は不明である。

484～488は、出土地点が抜取穴か柱穴掘方埋土に伴うものか、いずれとも判断し難いものを一括した。484はP3、485はP5、486と487はP7から出土した。器種は壺、甕、高坏がある。486は外面に煤が付着する。484は肩部の張りはなく、胴部中位に最大径がくる厚手の甕であるが、内面ヘラケズリの範囲は胴部中位以下である。これは、墳丘墓の北側に位置するSI26の中央ピットから出土した破片と接合した。486は1/8以下の小破片からの復元であるが、中形品と見られる。488は口縁部



第148図 絵画土器

外面に3条凹線を施した後、貝殻腹縁による連続刺突を施した小形の高坏である。P8を切るピットから出土した。また図化していないが、P6とP7抜取穴からはいずれも甕胴部片が出土している。いずれも内面に煤が付着する点や、胎土や色調からみて、同一個体の可能性がある。

絵画土器(第148図489～495、PL.114・115) 7点ほど図化した。489・491・493～495及び墳丘裾で報告した423は、いずれも大形壺の口縁部から肩部の破片であるが、内面に粗いヨコハケを施すといった点や、胎土、色調からみて、同一個体とみられる。出土地点は、墳頂部、墳丘裾、区画溝、張出部、墳丘墓西側の谷部と広範囲に及ぶ。また未実測のものが若干あり、その中にも谷部での出土ながら、同一個体と見られるものがある。

489は2つのモチーフが認められ、大小を描き分けている。タテハケ後横ナデによる器面調整の上から、左端に鋭利な工具による細線でシカと見られる線刻が施され、中央にも同様の線で、斜め方向の描線がみられる。右端は断面V字形の、鋭利ではあるがやや太い線で、同様にシカと見られる線刻が描かれているが、頭部と前足1つ分を欠く。またこれを描く前に、斜め方向の描線をナデ消している。

491は489のやや下、胴部との境の貼付突帯の破片で、四足動物が描かれている。他の例から見て、シカをモチーフとしたものとみられる。線刻の工具は他と異なり、断面は浅くV字形ではない。描線は太さ約1mmあり、線もややぎこちない。493は墳丘墓西側の谷部出土であるが、489と同一個体とみられることから、ここに掲載した。描線の断面形V字形であることから、鋭利な工具による線刻であるが、線はやや太い。前足を描いたものと推定され、他の例から見てシカの前足部とみられる。494は左上から右下へかけて線刻を施した後、右上から左下へ線刻を施す。495は横方向の線刻をナデ消した後、左上から右下へ1条の線刻を施す。494も495も、ともに描線は鋭利である。このほか、490や492は胎土や色調からみて、別個体とみられる。490は谷部出土のものである。壺の肩部の破片で、縦方向のハケメの後、ヨコナデによる器面調整の上から鋭利な工具による線刻が施される。モチーフはシカと見られ、首の部分は胴部の線を付け足して延長している。2本の前足は、胴部の線描の後に描かれている。

492は墳頂部出土の壺の肩部の破片である。縦方向のハケメの後ヨコナデによる器面調整の上から、鋭利な工具で線刻を行う。頭部はV字状に表現されており、前足や頭部の一部は線を何度もなぞるようにして描いている。胴部を描いた後、前足と見られる2本の線と、頭部を描く。他の例からみて、モチーフはシカと見られる。

以上のことから墳丘墓出土の絵画土器である大形壺には、肩部をめぐるようにシカが少なくとも4体描かれていたとみられる。また別個体の可能性がある絵画土器も墳頂部や西側の谷部から見つかったことから、墳頂部にシカが描かれた複数個体の壺が、並んでいた可能性がある。

(3)小結

墳丘墓各所から土器が出土している。前節までの記載で明らかなおおり、墳丘墓の構築は数段階に分けられる。墳丘墓出土土器も、その出土地点によって構築の諸段階に対応させることが可能である。

まず、2基の埋葬段階に伴う土器は、第2主体部の墓壇上層出土土器である。上下に拡張した口縁端部に、2ないしは3条の凹線文を施す甕が主体である。頸部貼付突帯は認められない。次に墳丘構築段階に伴う土器は、盛土内出土土器である。甕が主体を占め、高坏も伴う。甕は第2主体部のものと似るが、頸部貼付突帯を持つものや、口縁端部にキザミが入るものがある。次に柱穴掘削段階に伴う土器は、柱穴掘方出土土器であり、高坏と見られる脚部等がある。柱の抜き取りに伴う土器は、抜

取穴出土土器である。口縁部が立ち上がる無頸壺や、頸部貼付突帯をもつ甕がある。2次盛土に伴う土器は定かではないが、次の貼石設置段階に伴う土器は、貼石掘方出土土器であり、小形壺や底部片である。最後に墳丘墓完成後の段階に伴う土器は、墳頂部及び周辺から出土の土器である。他の箇所と同様に甕が主体を占めるが、壺や大形の赤色塗彩を施した土器や絵画土器を伴う点が特徴的である。このように構築段階の変遷からみて若干の時間差が想定されるものの、土器様相からみる限り、顕著な時期差をもつものではない^(註8)。いずれも清水編年のIV-2~3様式のものともみられることから、梅田萱峯墳丘墓は弥生時代中期後葉(IV-2~3)の築造と考えられる。(小山)

第6節 墳丘墓周辺の土坑

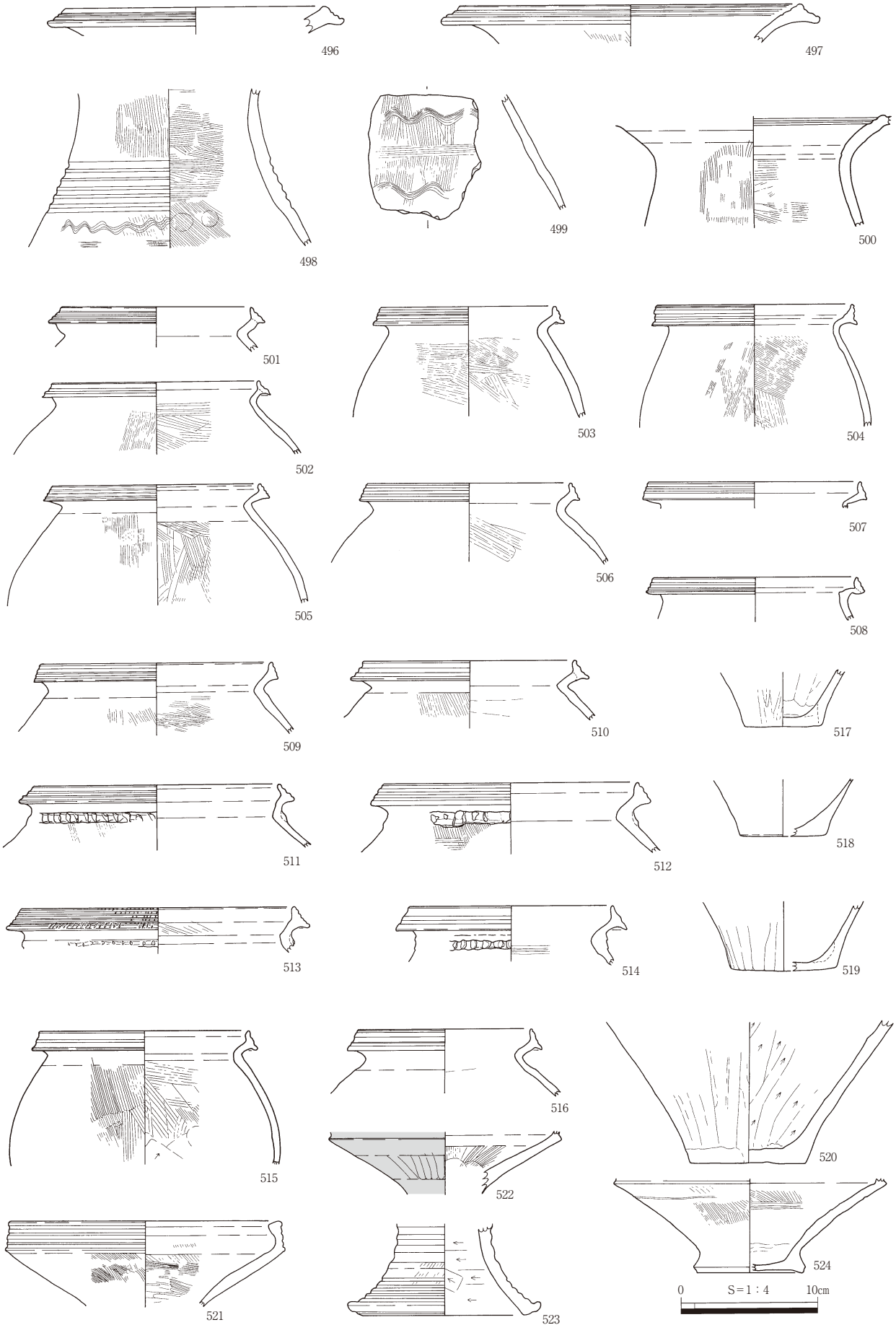
SK116(第149・150図、PL.72~74、115~117)

F29グリッド、標高63.6mの尾根平坦部に位置する。西側は墳丘墓に接する。南北3.4m、東西3.84mの不整な方形を呈する。深さは南側で最大22cmを測る。北東、南東隅は根の攪乱により失われている。平坦な底面にてピットが若干検出されたが、いずれも浅く、柱穴とは考え難い。遺物は埋土中から底面直上にかけて出土しており、平面的には南東側に多く分布していることから、高所側にあたる南東側から投棄されたものとみられる。隣接する墳丘墓との層位的関係は、検証可能な場所が限られ、また木の根の攪乱が顕著なこともあって分かり難かったが、SK116が墳丘裾を切り込む状況が窺えた。

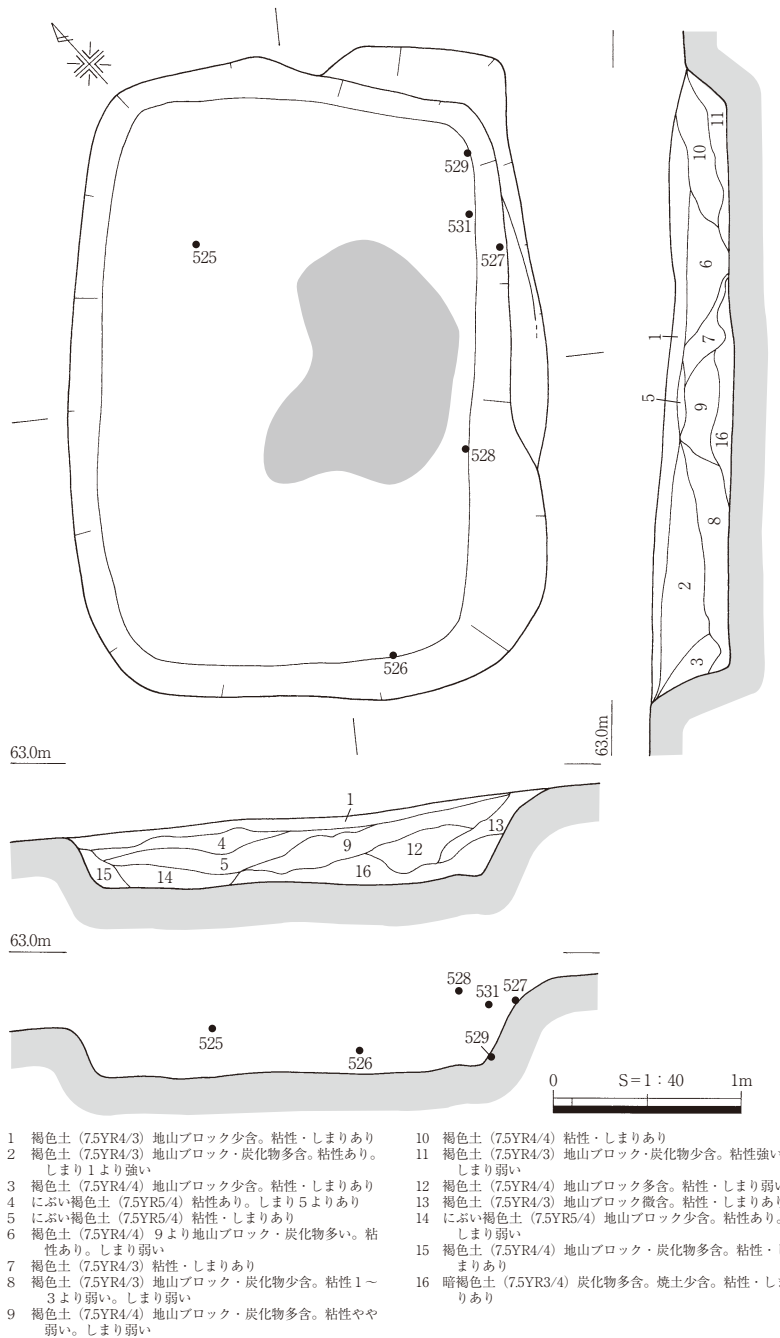


- は墳丘盛土
- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 地山ブロック微含。粘性弱い。しまりあり
- 2 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまりあり
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 地山ブロック多含。粘性・しまりあり
- 4 黄褐色土 (10YR5/6) ホーキブロック含。粘性・しまりあり
- 5 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりあり
- 6 褐色土 (10YR4/4) 粘性弱い。しまりあり
- 7 褐色土 (10YR4/4) 地山ブロック微含。粘性・しまりあり
- 8 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性やや弱い。しまりあり
- 9 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物と焼土多含。粘性・しまりあり
- 10 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまりあり
- 11 褐色土 (10YR4/6) 粘性・しまりあり
- 12 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性・しまりあり

第149図 SK116



第150図 SK116出土遺物



第151図 SK188

524は前述したように墳丘墓と唯一接合関係を示すものである。短い脚付の鉢か壺と思われるが、特異な器形である。胎土や色調も異質なことから、他地域からの搬入品の可能性がある。

隣接する墳丘墓とSK116の時期的関係については、層位的にはSK116が、墳丘墓より新しい遺構と位置づけられる。遺物からみると、墳丘墓よりも若干古い要素が残るようにも見受けられるが、おおむね時期的に併行すると見られる。清水編年に照らし合わせると、おおむねIV-2～3様式に該当する。このことからSK116は、墳丘墓とほぼ同じ弥生時代中期後葉(IV-2～3)のものと位置づけられる。

(小山)

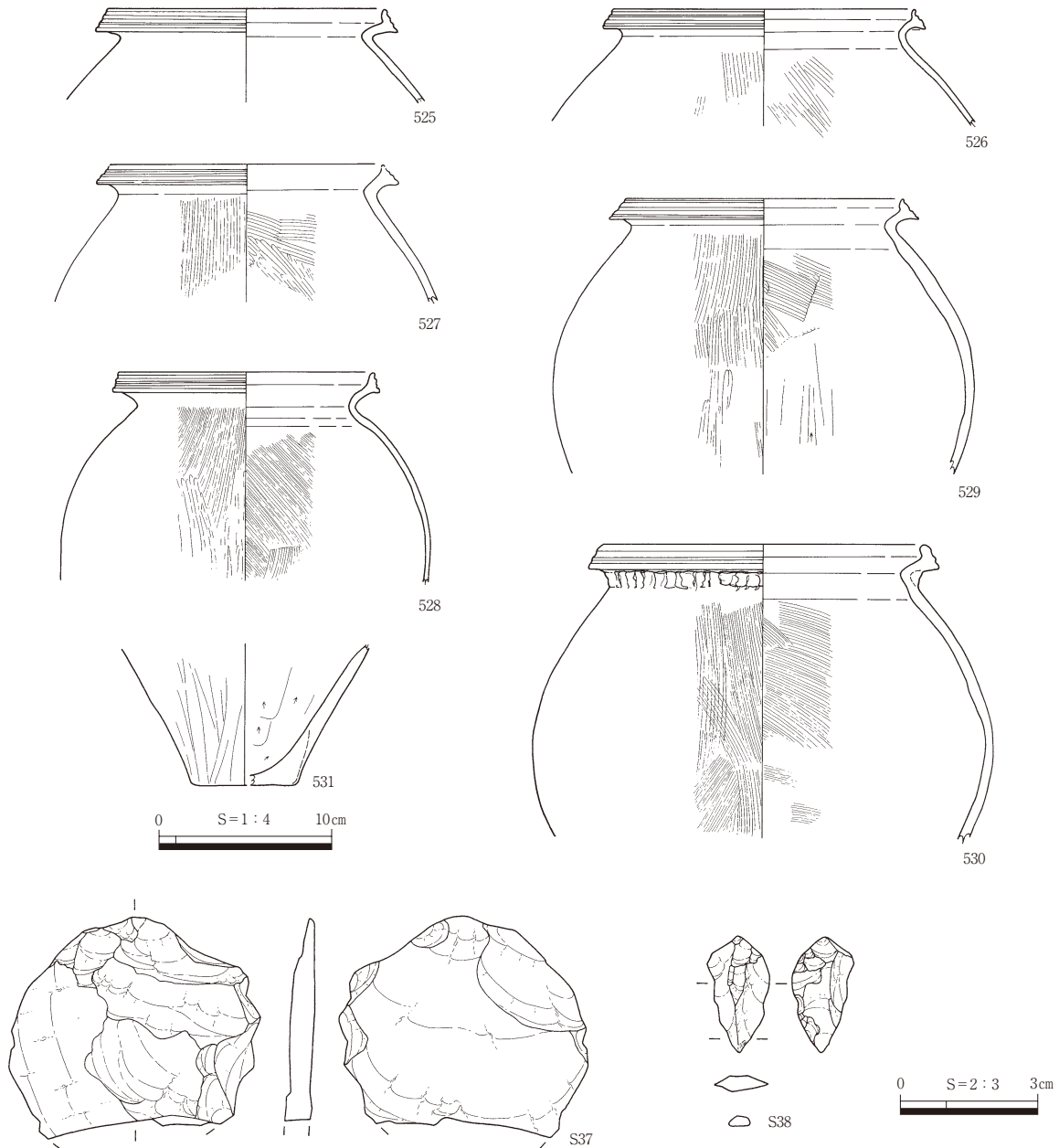
SK188(第151・152図、PL.118、写真7・8)

墳丘墓の西側、H28・29グリッドの谷へ向かう斜面に位置する。墳丘墓周辺の精査により確認された方形土坑である。

出土遺物には、多量の弥生土器が見られるが、すべて破片となって出土した。多少の接合関係は認められるものの、完形に復元できるものは皆無である。隣接する墳丘墓出土土器との接合関係が認められたのは、524が唯一の例であり、墳頂部南東側から出土の土器片と接合した。

器種は壺、甕、高坏などが見られる。赤色塗彩を施す土器は、7点と少量ながら出土した。496～500は壺である。498は緩く括れる頸部に凹線文を施す壺であるが、肩部に波状文を施す。499は壺の肩部に櫛描波状文及び直線文を施す。501～516は甕である。中には煤が付着する破片も若干認められる。甕の口縁部は、端部を上下に拡張し3条程度の凹線文を施すものが一般的である。甕の胴部はいずれも残りが悪く、内面ヘラケズリが及ぶ範囲は不明である。頸部貼付突帯を施すものも若干あるがいずれも篋状工具による連続刺突を行う。513は口縁端部に凹線を施した後、キザミを入れる。

521～523は高坏である。521は口縁部がやや内傾する。523は脚裾部及び脚筒部に凹線を施す。



第152図 SK188出土遺物

長軸3.4m、短軸2.5mの隅丸方形を呈し、斜面上方側で深さ0.4mを測る。壁溝やピットは検出されていない。埋土下層は炭化物を多く含んでいたが、底面中央付近から東壁付近にかけてとくに顕著であった。

埋土は斜面の傾斜に沿うように堆積しており、遺構廃絶後、自然に埋没したものと思われる。

遺物は埋土中を中心に出土した。図化できたものは、上下に拡張された口縁端部に凹線文を施した甕である。530は頸部に貼付突帯を巡らせる。S37はサヌカイトの剥片である。上縁部から背面左側縁にかけて摩滅している。他の稜線には摩滅が認められないため、人為的な要因によるものであろう。S38は先端部の両側縁が摩滅している。ただ背腹両面は摩滅していないので、錐のように回転運動を伴う作業に使われたとは思えない。

SK188は出土遺物の特徴から弥生時代中期後葉(IV-2~3)と考えられる。

(湯村)



写真7 SK188遺物出土状況



写真8 SK188炭化物出土状況

註

- (1) 大川泰広・小山浩和2008「墳丘墓・SK116の概要」(湯村・小山2008)
- (2) 遺跡から直線距離にして1 km北の筧津の海岸部一帯は礫浜であり、穿孔具による孔を持つ円礫が比較的容易に見つかる。
- (3) 貼石の石材の鑑定は、鳥取大学名誉教授赤木三郎氏に現地にて御教示いただいた。
- (4) 片側のみ独立棟持柱を伴う掘立柱建物例は僅少であるが、大山町茶畑第1遺跡で見られる。掘立柱建物12とされる大型の独立棟持柱建物は、東の妻側のみ独立棟持柱を伴う。柱穴内からは弥生時代の中期後葉の土器が出土する(西川2004)。
- (5) SI26の中央に位置するP7の最下層から出土した土器片と接合した(湯村・小山2008、37頁第29図65)。
- (6) 貼石直下から埋葬施設が検出された例として、洞ノ原17号墓(米子市)、四拾貫小原遺跡(広島県三次市)がある(岩田ほか2000、潮見1969)。
- (7) 妹尾氏によると、大形の高坏に似る器形のものは、佐久良遺跡(広島市)、山根屋遺跡(岡山県新見市)、紫雲出山遺跡(香川県三豊市)出土例がある(妹尾1992)。
- (8) 墳丘裾出土土器の中に一部弥生時代後期中葉に下る土器も見られたが、流土中の出土で、数量的にはごくわずかであり、墳丘墓の築造時期を示すものではない。

参考文献

- 湯村 功・小山浩和編2008『梅田萱峯遺跡Ⅳ』鳥取県埋蔵文化財センター
 西川 徹編2004『茶畑第1遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
 妹尾周三1992「注口付きの脚台付鉢形土器について」『古代吉備』第14集
 岩田文章ほか編2000『妻木晩田遺跡』淀江町教育委員会
 潮見 浩編1969『四拾貫小原』四拾貫小原発掘調査団

第5章 自然科学分析の成果

第1節 梅田萱峯遺跡出土炭化材の年代測定および樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

梅田萱峯遺跡は、大山北麓に延びる尾根の北端部付近に位置する。発掘調査により、弥生時代～奈良時代の集落跡に伴う遺構や、県内最古の事例になる弥生時代中期後葉と考えられる墳丘墓などが検出されている。

今回の分析調査では、発掘調査により検出された時期不明の土坑から出土した炭化材について、放射性炭素年代測定・樹種同定を実施し、年代および木材利用状況に関する情報を得る。また、竪穴住居から出土した炭化材についても樹種同定を実施し、木材の利用状況に関する情報を得る。

1 試料

試料は、竪穴住居(SI45)から出土した炭化材5点(試料No.1～5)、3基の土坑(SK142、150、160)から出土した炭化材9点(試料No.6～14)の合計14点である。

2 分析方法

(1)放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。得られた年代値は、 $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いて同位体効果の補正を行う。

年代測定値は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用いて暦年較正を実施する。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大

気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。また、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。今回の試料は、いずれも炭化材であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表6、暦年較正結果を表7に示す。補正年代は、SK142の3点が $1,290 \pm 30\text{BP}$ ～ $1,380 \pm 30\text{BP}$ 、SK150の3点が $860 \pm 30\text{BP}$ ～ $890 \pm 30\text{BP}$ 、SK160の3点が $920 \pm 30\text{BP}$ ～ $970 \pm 30\text{BP}$ を示す。また、暦年較正值は、測定誤差を σ として計算させた結果、SK142の3点がcalAD643～768、SK150の3点がcalAD1,051～1215、SK160の3点はcalAD1,022～1,159である。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を表8に示す。炭化材は、全て広葉樹で、分類群(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・スダジイ・ネムノキ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、

表6 放射性炭素年代測定結果

| 試料No. | 遺構 | 種類 | 補正年代 BP | $\delta^{13}\text{C}$ (%) | 測定年代 BP | Code No. |
|-------|-------|-----|----------------|------------------------------|----------------|------------|
| 6 | SK142 | 炭化材 | $1,290 \pm 30$ | -25.04 ± 0.58 | $1,290 \pm 30$ | IAAA-81235 |
| 7 | SK142 | 炭化材 | $1,350 \pm 30$ | -23.42 ± 0.53 | $1,330 \pm 30$ | IAAA-81236 |
| 8 | SK142 | 炭化材 | $1,380 \pm 30$ | -28.97 ± 0.38 | $1,440 \pm 30$ | IAAA-81237 |
| 9 | SK150 | 炭化材 | 890 ± 30 | -28.17 ± 0.40 | 940 ± 30 | IAAA-81238 |
| 10 | SK150 | 炭化材 | 880 ± 30 | -29.32 ± 0.36 | 950 ± 30 | IAAA-81239 |
| 11 | SK150 | 炭化材 | 860 ± 30 | -28.49 ± 0.53 | 920 ± 30 | IAAA-81240 |
| 12 | SK160 | 炭化材 | 970 ± 30 | -28.39 ± 0.61 | $1,020 \pm 30$ | IAAA-81241 |
| 13 | SK160 | 炭化材 | 920 ± 30 | -28.11 ± 0.40 | 970 ± 30 | IAAA-81242 |
| 14 | SK160 | 炭化材 | 930 ± 30 | -24.51 ± 0.51 | 930 ± 30 | IAAA-81243 |

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表7 暦年較正結果

| 番号 | 補正年代 (BP) | 暦年較正年代(cal) | | | 相対比 | Code No. |
|----|------------|-------------|--|--|----------------------------------|------------|
| 6 | 1,288 ± 28 | σ | cal AD 675 - cal AD 716 cal AD 744 - cal AD 768 | cal BP 1,275 - 1,234 cal BP 1,206 - 1,182 | 0.617 0.383 | IAAA-81235 |
| | | 2σ | cal AD 666 - cal AD 774 | cal BP 1,284 - 1,176 | 1.000 | |
| 7 | 1,354 ± 29 | σ | cal AD 649 - cal AD 675 | cal BP 1,301 - 1,275 | 1.000 | IAAA-81236 |
| | | 2σ | cal AD 635 - cal AD 710 cal AD 747 - cal AD 766 | cal BP 1,315 - 1,240 cal BP 1,203 - 1,184 | 0.946 0.054 | |
| 8 | 1,375 ± 28 | σ | cal AD 643 - cal AD 667 | cal BP 1,307 - 1,283 | 1.000 | IAAA-81237 |
| | | 2σ | cal AD 612 - cal AD 680 | cal BP 1,338 - 1,270 | 1.000 | |
| 9 | 891 ± 27 | σ | cal AD 1,051 - cal AD 1,081 cal AD 1,126 - cal AD 1,135 cal AD 1,152 - cal AD 1,190 cal AD 1,197 - cal AD 1,207 | cal BP 899 - 869 cal BP 824 - 815 cal BP 798 - 760 cal BP 753 - 743 | 0.347 0.084 0.464 0.104 | IAAA-81238 |
| | | 2σ | cal AD 1,043 - cal AD 1,105 cal AD 1,118 - cal AD 1,215 | cal BP 907 - 845 cal BP 832 - 735 | 0.369 0.631 | |
| 10 | 879 ± 27 | σ | cal AD 1,058 - cal AD 1,073 cal AD 1,155 - cal AD 1,213 | cal BP 892 - 877 cal BP 795 - 737 | 0.132 0.868 | IAAA-81239 |
| | | 2σ | cal AD 1,044 - cal AD 1,099 cal AD 1,119 - cal AD 1,142 cal AD 1,147 - cal AD 1,220 | cal BP 906 - 851 cal BP 831 - 808 cal BP 803 - 730 | 0.244 0.079 0.677 | |
| 11 | 862 ± 28 | σ | cal AD 1,162 - cal AD 1,215 | cal BP 788 - 735 | 1.000 | IAAA-81240 |
| | | 2σ | cal AD 1,050 - cal AD 1,083 cal AD 1,124 - cal AD 1,136 cal AD 1,151 - cal AD 1,254 | cal BP 900 - 867 cal BP 826 - 814 cal BP 799 - 696 | 0.103 0.024 0.872 | |
| 12 | 966 ± 32 | σ | cal AD 1,022 - cal AD 1,048 cal AD 1,086 - cal AD 1,123 cal AD 1,138 - cal AD 1,150 | cal BP 928 - 902 cal BP 864 - 827 cal BP 812 - 800 | 0.379 0.466 0.155 | IAAA-81241 |
| | | 2σ | cal AD 1,018 - cal AD 1,155 | cal BP 932 - 795 | 1.000 | |
| 13 | 918 ± 28 | σ | cal AD 1,044 - cal AD 1,098 cal AD 1,119 - cal AD 1,142 cal AD 1,147 - cal AD 1,159 | cal BP 906 - 852 cal BP 831 - 808 cal BP 803 - 791 | 0.612 0.258 0.131 | IAAA-81242 |
| | | 2σ | cal AD 1,029 - cal AD 1,184 | cal BP 921 - 766 | 1.000 | |
| 14 | 934 ± 30 | σ | cal AD 1,039 - cal AD 1,053 cal AD 1,078 - cal AD 1,153 | cal BP 911 - 897 cal BP 872 - 797 | 0.157 0.843 | IAAA-81243 |
| | | 2σ | cal AD 1,025 - cal AD 1,164 | cal BP 925 - 786 | 1.000 | |

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

単列、1～20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

- ・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は2～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。

表8 樹種同定結果

| 試料No. | 遺構 | 分類群 和名 | 学名 |
|-------|-------|---------------|---|
| 1 | SI45 | コナラ属アカガシ亜属 | Quercus subgen. Cyclobalanopsis |
| 2 | SI45 | スダジイ | Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai |
| 3 | SI45 | スダジイ | Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai |
| 4 | SI45 | スダジイ | Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai |
| 5 | SI45 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節 | Quercus subgen. Quercus sect. Cerris |
| 6 | SK142 | クリ | Castanea crenata Sieb. et Zucc |
| 7 | SK142 | ネムノキ | Albizia julibrissin Durazz. |
| 8 | SK142 | スダジイ | Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai |
| 9 | SK150 | クリ | Castanea crenata Sieb. et Zucc |
| 10 | SK150 | クリ | Castanea crenata Sieb. et Zucc |
| 11 | SK150 | クリ | Castanea crenata Sieb. et Zucc |
| 12 | SK160 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 | Quercus subgen. Quercus sect. Prinus |
| 13 | SK160 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 | Quercus subgen. Quercus sect. Prinus |
| 14 | SK160 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 | Quercus subgen. Quercus sect. Prinus |

道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～2列、1～15細胞高。

- ・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は接線方向に疎な3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列(希に2列)、1～20細胞高。

- ・ネムノキ (*Albizia julibrissin* Durazz.) マメ科ネムノキ属

環孔材で孔圏部は3～4列、孔圏外で管径を減じた後、年輪界に向かって単独または2～4個が複合して径を漸減させながら配列し、年輪界付近ではほとんど目立たなくなる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～2細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状で晩材部ではやや翼状となる。

4 考察

(1) SI45の炭化材について

竪穴住居跡(SI45)から出土した炭化材は、スダジイを中心にアカガシ亜属とクヌギ節が混じる組成を示した。スダジイとアカガシ亜属は、暖温带常緑広葉樹林を構成する常緑広葉樹であり、クヌギ節は二次林や河畔林等を構成する落葉広葉樹である。アカガシ亜属とクヌギ節の木材は重硬で強度が高い材質を有する。スダジイは、アカガシ亜属やクヌギ節には劣るが、やや硬い部類に入り、強度も中程度とされる。これらの結果から、SI45では、比較的強度の高い木材を中心に利用されていたことが推定される。

本遺跡では、弥生時代中期後葉の焼失住居跡から出土した炭化材に常緑広葉樹のスダジイを中心に7種類が確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2007a)。常緑広葉樹が多いが、針葉樹のイヌガヤや落葉広葉樹のニガキ、ムクロジなども混在する。また、周辺に位置する茶畑六反田遺跡の弥生時代中期とされる住居跡から出土した柱材に常緑広葉樹のアカガシ亜属やツバキ属、板材に針葉樹のモミ属や落葉広葉樹のヤマグワが認められている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2004a)。笠見第3遺跡では、弥生時代後期の住居跡出土炭化材にタブノキ属やシイ属などの常緑広葉樹とクリやヤマグワなどの落葉広葉樹が混在する結果が得られている(古川・船橋,2004;パリノ・サーヴェイ株式会社,2004b)。この他、筥津乳母ヶ谷第2遺跡では、弥生時代後期の住居跡出土炭化材にクリを主とし、

ヤマグワヤクスノキ科が混じる結果が得られている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2007b)。古墳時代前期とされる三林遺跡では、点数は少ないがクリとスダジイが認められている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2004c)。古墳時代中期とされる久蔵峰北遺跡では、スダジイを中心にツバキ属とケンボナシ属が混じる結果となっている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2004d)。古墳時代の資料は少ないが、弥生時代中期から古墳時代中期にかけて、スダジイ(シイ属)が比較的多く利用される傾向がある。

(2)土坑の炭化材について

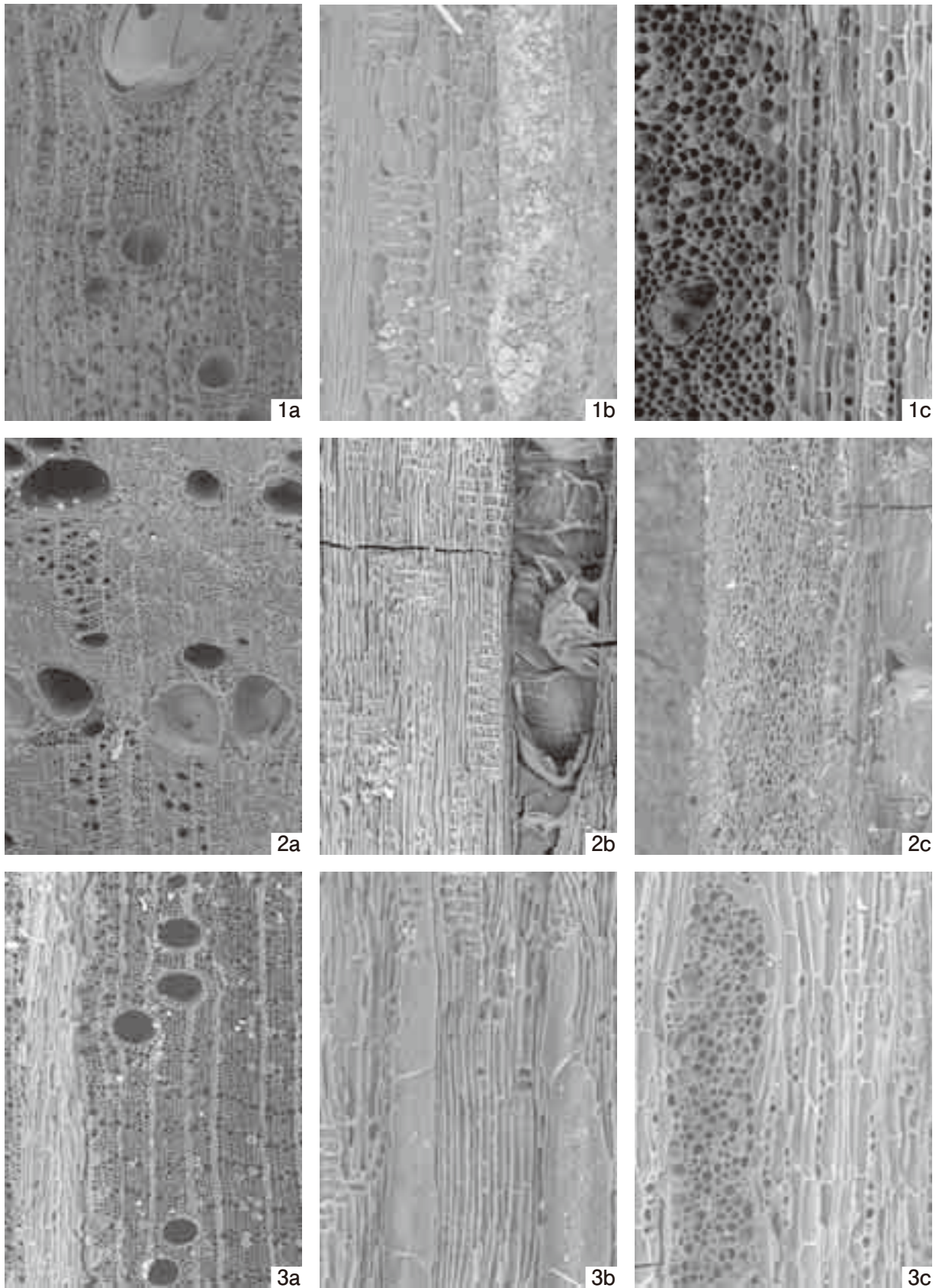
土坑の炭化材は、何らかの理由で火を受けていることは明らかであるが、用途などの詳細は不明である。各土坑から出土した炭化材は、常緑広葉樹のスダジイが1点認められた他は、全て落葉広葉樹からなり、比較的強度の高い材質を有する種類が多い。また、各土坑で種類構成が異なり、SK142では3点の試料がクリ・スダジイ・ネムノキに同定され、雑多な種類構成となっている。これに対して、SK150は3点ともクリ、SK160は3点ともコナラ節で、単一の樹種からなる。このことから、各土坑で木材利用等に差異があった可能性が示唆される。

一方、各土坑の炭化材の年代は、放射性炭素年代測定による暦年較正結果から、SK142が7世紀中頃～8世紀中頃、SK150が11世紀中頃～13世紀初頭、SK160が11世紀～12世紀中頃と推定される。SK150とSK160は、暦年較正結果では時期が重なるが、補正年代をみる限りでは、それぞれの遺構で年代値が集中している。したがって、調査を行った3基の土坑の中では、SK142が古い時期の遺構と考えられる。なお、SK142では、年代値が若干バラつくが、樹齢の誤差で説明できる程度の範囲である。

以上、調査を行った土坑のうち、SK142は他のSK150・SK160とは異なる年代および樹種組成を示していることになる。このような差異については、今後、各土坑の形成・埋没過程といった発掘調査成果に基づいて評価することが大切と考える。

引用文献

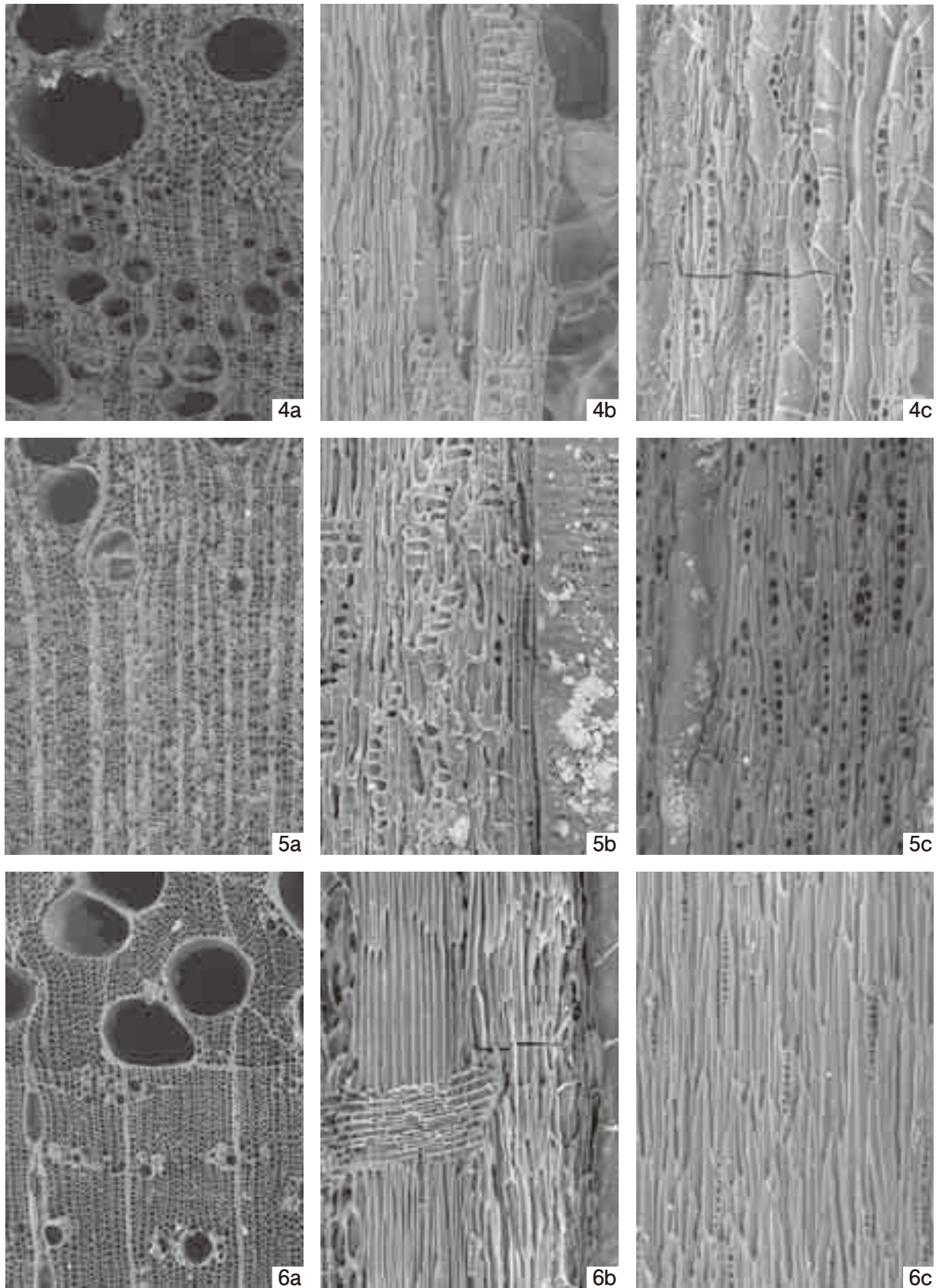
- 古川 郁夫・船橋 晃,2004,笠見第3遺跡焼失住居跡から出土した炭化材の樹種。「一般国道9号(東伯中山道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 鳥取県東伯郡東伯町 笠見第3遺跡 本文編」,鳥取県教育文化財団調査報告書86,(財)鳥取県教育文化財団,488-497.
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2004a,茶畑六反田遺跡から出土した炭化材の樹種。「一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 鳥取県西伯郡名和町 茶畑六反田遺跡(0・5区)」,鳥取県教育文化財団調査報告書94,(財)鳥取県教育文化財団,124-125.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2004b,笠見第3遺跡の自然科学分析。「一般国道9号(東伯中山道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 鳥取県東伯郡東伯町 笠見第3遺跡 本文編」,鳥取県教育文化財団調査報告書86,(財)鳥取県教育文化財団,464-466.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2004c,三林遺跡焼失住居跡出土炭化材の樹種同定。「一般国道9号(東伯中山道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ」,鳥取県教育文化財団調査報告書88,(財)鳥取県教育文化財団,118-122.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2004d,久蔵峰北遺跡から出土した炭化材の樹種。「一般国道9号(東伯中山道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ」,鳥取県教育文化財団調査報告書89,(財)鳥取県教育文化財団,199-200.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2007a,梅田萱峯遺跡1区の自然科学分析。「梅田萱峯遺跡1」,鳥取県埋蔵文化財センター,136-145.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2007b,窺津乳母ヶ谷第2遺跡の自然科学分析。「窺津乳母ヶ谷第2遺跡1」,鳥取県埋蔵文化財センター,84-93.



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(試料 No.5)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料 No.12)
 3. コナラ属アカガシ亜属(試料 No.1)
- a:木口,b:柁目,c:板目

200μm:a
200μm:b,c

写真9 梅田萱峯遺跡6区の炭化材(1)



4. クリ (試料 No.6)
5. スダジイ (試料 No.2)
6. ネムノキ (試料 No.7)
a:木口,b:柁目,c:板目

200μm:a
200μm:b,c

写真10 梅田萱峯遺跡6区の炭化材(2)